

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Some Problems of the Pastoralism and Agriculture of the Fulbe Jenngelbe of Senegal : A Case Study

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 了 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004515

フルベ族の牧畜と農耕をめぐる諸問題

—ジェンゲルベ・グループの

生業に関する民族誌的研究—

小 川 了*

Some Problems of the Pastoralism and Agriculture of the
Fulbe-Jenngelbe of Senegal: A Case Study

Ryo OGAWA

Traditionally the Fulbe were a pastoral people of the Sahelian Region of West Africa. The so-called pure Fulbe (Bororo) remain as nomadic pastoralists in Niger and Chad, but most other Fulbe groups now practice rainy season agriculture in addition to their traditional cow-centered pastoralism. The economic activities of the Jenngelbe, for example, a Fulbe group living in Jolof, Senegal, focus principally on pastoralism, but they also cultivate small millet and other crops during the short rainy season. In the dry season, which lasts for almost eight months, many of Jenngelbe travel with their herds in search of forage and water.

Recently Ruddle [1979] surveyed the present situation of dryland pastoral economies, indicating some of the problems of pastoralism, and suggesting various management solutions to preserve and enhance traditional pastoral nomadism as a viable adaptive strategy. My study, partly suggested by Ruddle's paper, attempts to analyze some of the problems which arise in the traditional pastoral life of the Jenngelbe.

Climatically, the Jolof of Senegal is in the Sahelian Region. It receives a scant and sparsely distributed rainfall of 400-500 mm/year. Since the beginning of this century, the Wolof people, who are agriculturalists, settled heavily in this region. The Jenngelbe were slowly "Wolofized"; most of them abandoned their traditional style of simple house-building and adopted the Wolof housestyle, and began small-scale cultivation of small millets for subsistence purposes.

* 国立民族学博物館第3研究部

The Wolof people, who do not herd cattle, cultivate large fields which they relocate or enlarge constantly, since the fields are not fertilized by cattle droppings. Their fields are, therefore, not enclosed.

The Jennelbe, on the other hand, have many cattle and enclose their fields to protect them from the animals. In addition, their fields are small and do not need constant relocation because they are fertilized with cattle droppings. Therein lies a conflict between the pastoralists and the agriculturalists. Moreover, enlarging the cultivated area diminishes the available pastures.

In the dry season, most Jennelbe move with their livestock. For some this is short distance transhumance in the Jolof Region. Others move to the large urban centers in the Sine-Saloum Region, such as Kaolack, about 200 km from Jolof. Yet other people relocate with their herds to the small towns and villages of the Baol Region.

My field research showed that the people who move to the Baol Region have retained a complementary relationship with the Wolof, as manifested in the exchange of pastoral products such as milk and cattle dung for agricultural products and water. Those who practice transhumance in the Jolof or who go to Kaolack no longer expect to maintain this relationship.

In this paper, I have attempted to show the ecological condition of the Jolof, have considered the reasons for the agriculturalists' increasing settlement in Jolof, and have described the impact of monetization on the pastoral mode of life.

I. はじめに	1. 主要農作物
1. Ruddle 論文をふまえて	(1) トウジンビエ, <i>Pennisetum typhoideum</i>
2. 本稿の構成について	(2) 落花生, <i>Arachis hypogaea</i>
II. セネガルにおけるサヘル地域の環境	(3) 補助的農作物
1. 気温と降雨量	2. トウジンビエの耕作
2. 植物相	V. 牧畜
3. 人々と家畜	1. 雨季の放牧
III. 季節暦と活動のサイクル	2. <i>kawle</i> , <i>dabbunde</i> , そして <i>ceedu</i> の初め頃
1. <i>ndungu</i>	3. 乾季の移牧
2. <i>kawle</i> および <i>dabbunde</i>	VI. 考察——結論にかえて——
3. <i>ceedu</i>	1. ジョロフ地方への農耕民の進出
4. <i>demmunaare</i> および <i>selselle</i>	2. <i>overgrazing</i> と牧草地の劣悪化
IV. 雨季の農耕	

I. はじめに

1. Ruddle 論文をふまえて

牧畜民社会¹⁾の研究にあたってはまずその人々が住む自然環境を考察することが重要であることは多くの研究に示されている [IMANISHI 1954; GULLIVER 1955; DYSON-HUDSON 1966; SPOONER 1973]。このことはどのような社会を研究する場合にも大切なことではあろうが、牧畜民の場合は特に、乾燥、ないしは半乾燥という環境条件の厳しい土地を彼らの生活の主舞台としていることを考えると明白に理解される。彼らは人間が直接利用しうる自然資源に乏しい地域において、家畜を通して資源を活用するという適応をなしとげたのである [梅棹 1976]。

さて、牧畜民は現在もなお世界総陸地面積の3分の1以上に及ぶ乾燥、あるいは半乾燥地域でその生業を続けているのであるが、近代文明の発達にともなってさまざまな問題をもつに至った。

牧畜民社会の危機については梅棹 [1976: 39-41, 155-157] も指摘したとおりであるが、最近、Ruddle は牧畜という生業形態の危機について大変要領よく整理された論文を発表している [RUDDE 1979]。この論文は牧畜という生業形態が直面している諸問題を列挙すると同時に、それらの問題への解決策を呈示しているという点で学ぶところ多大のものがある。ただ、Ruddle の論文は牧畜民一般²⁾に共通する基本的な問題を取りあげ、それに対する共通の解決策を示すものであり、Ruddle 自身述べているように個々の牧畜民はそれぞれ具体的な個別の問題を抱えており、したがってその解決策も当然少しづつ異なったものとなるであろう。

本稿は Ruddle の論文に示唆を受け、Ruddle が一般的な問題として示した諸事項に対し、ひとつのケース・スタディとしてセネガルのフルベ族、ジェンゲルベ・グループ³⁾

1) 牧畜民、特に nomads といった場合、「牧畜文化」と規定して考えることに対しては注意が必要であることを Spooner は指摘している [SPOONER 1973: 3]。つまり、「すべて」の牧畜民に共通した文化相、あるいは社会組織というものも、また、牧畜民にしかみられないという文化相もないからである。しかし、「牧畜文化」という言葉を使うことの適、不適は別にして、牧畜民に「一般的」にみられる特質は存在するようである [cf. GOLDSCHMIDT 1979: 24]。

2) 主としてアフリカの牧畜民についてはあるが。

3) 人口500万から600万と推定されるフルベ族が西アフリカのサヘル地域一帯で牧畜を伝統的な生業としながらも多くの地域で農耕をも営む人々であることは周知のとおりであるが、ここでセネガルのジェンゲルベ、Jemgelbe、グループというのは文化的に等質性を維持しているひとつの集団である。伝説に残る始祖を共有しているという意味でひとつのクランといってもよいと思うが、むしろセネガルにいるフルベ族の他のグループ、ハーボーベ Haaboobe、ラッチェナーベ Laccenaabe、との意識された文化的な差異を考慮して、ひとつの cultural group としてグループという語を用いる。ジョロフ地方にいるフルベ族はそのほとんどがジェンゲルベ・グループの人々である。

に関して考察を加えようとするものである。

2. 本稿の構成について

本稿は Ruddle の論文を念頭においた上で、ジェンゲルベ・グループの人々が牧畜民として直面している問題を考察することを主目的としている。しかしながら筆者は副次的な目的としてジェンゲルベ・グループの生業に関して民族誌的な記述をすることをも考慮に入れている。つまり、本稿の前半部ではジェンゲルベ・グループに関して、その生業を中心に記述することによって、後半部の考察を導く基盤にしようとするものである。ただし、「謝辞」の中に記したとおり、本稿が基盤としている調査⁴⁾はやむを得ない事情により予定の期間半ばにして中断せざるを得なかった。そのため資料は完全なものとはいえず、本稿の執筆中、筆者自身しばしば資料の不足を痛感したことを卒直に認めざるを得ない。それをあえてここに発表するのは今後に残された問題点をみずから明確にしておきたいためにほかならない。したがって前半部、つまり民族誌的記述の部分は予報、あるいは中間報告として読んでいただければ幸いである。

本稿の題名は「フルベ族の牧畜と農耕をめぐる……」となっているが、筆者は牧畜という生業により多くの関心をもっており、本稿の記述についても農耕に関するものよりは牧畜に関する記述により多くの比重がかけられていることを付記しておきたい。

Ⅱ. セネガルにおけるサヘル地域の環境

アフリカ大陸のもっとも西の端に位置する国、セネガルは地形的には平端な国である。セネガルの東南部、ギニアとマリに境を接するセネガル・オリエンタル地方には、わずかながら 400メートルを越える山岳部があるが、それを除けばセネガル全土は海拔30メートルから50メートルの間でなだらかな起伏をくりかえす砂土の多い平地で占められているといつてよい。

1. 気温と降雨量

セネガル全土について降雨量にもとづき気候区分をすると、南からギニア湾熱帯降雨林（年間降雨量 1,500 mm 以上）、つづいてスーダン型気候帯（降雨量 700 mm～

4) 本稿のもととなっているフィールドでの調査は主として1979年10月から1980年2月末までの間の五カ月のうち四カ月間におこなわれた。その他に1974年、1975年の7月、8月におこなった調査での資料も若干ふくめられている。

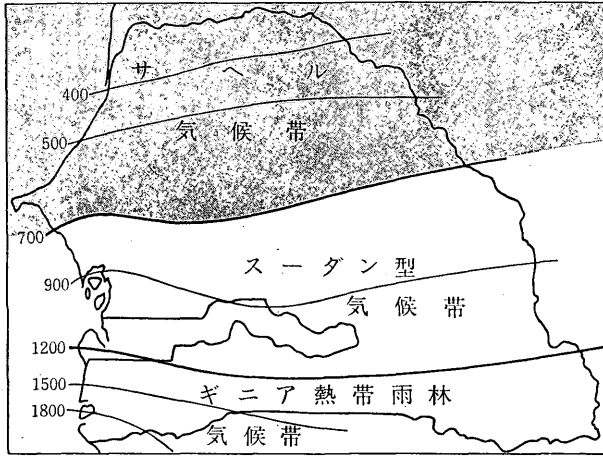


図1 セネガル全土、等雨線と植生による気候帯区分
(Adams et al. [1965: 211-212] にもとづき作図)

1,500 mm), そして北部はサヘル型気候帯 (降雨量 700 mm 以下) とよばれる三つの気候帯に大きく分けられる。ちなみにセネガルの最南部, ジガンシヨールの付近一帯では1年に 1,800 mm の降雨量がある一方, 北部のセネガル河流域一帯では 300 mm 前後にすぎない (図1)。

1年の気候は雨季と乾季のふたつにはっきりわかる。雨季はだいたい7月から10月までの間の3~4カ月間で, その他の期間はほとんど全く雨の降ることのない乾季である。

筆者がこれから述べようとするフルベ族, ジェンゲルベ・グループの人々はサヘル型気候帯を中心に, 年間を通しての牧畜と雨季の間だけの農耕とを生業としている。そこでサヘル型気候帯についてさらに詳しくみてみよう。

セネガルのサヘル型気候帯は北のセネガル河を境にしてサハラ砂漠と接している。筆者が調査をしたリングェール県について年間の気温を示すと次のとおりである (図2)。

最高気温は年間を通して 30°C を超しており, 特に4月, 5月は東北

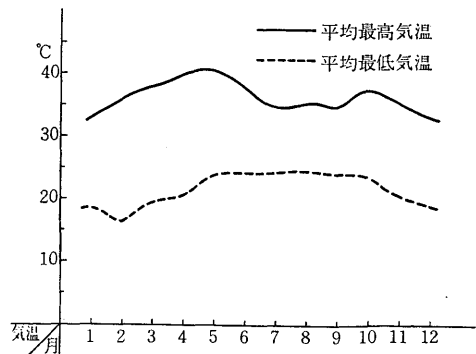


図2 リンゲールにおける年間気温 (°C) 1978年
注) セネガル共和国, 都市計画・運輸・公共事業省, 気象部において与えられた数字にもとづき作図

表1 リンゲールにおける降雨量 (mm)
1934年～1954年に関して

月	平均降雨量	平均降雨日数	最高降雨量	最低降雨量
1月	0	0	1.4	0
2月	0.3	0.2	34.5	0
3月	2.2	0.2	43.8	0
4月	0.1	0.1	1.1	0
5月	3.7	0.6	31.5	0
6月	25.4	3.2	104.2	0
7月	99.5	8.6	198.3	45.4
8月	217.5	12.9	395.3	46.9
9月	129.6	10.2	278.9	58.4
10月	49.3	4.0	195.5	0.4
11月	4.6	0.7	32.1	0
12月	1.7	0.4	30.9	0
年合計	533.9	41.1	853.6	204.7

Grosmaire [1957: 21] の数字による

のサハラ砂漠から熱風がふきつけ非常に暑い。しかもそれは乾燥した風であり、人々は肌にヒビがはいるようだという。この時期には日陰でも日中 40°C をこえることが多い。7月にはいり、雨季になると雨の降った直後は気温が下がり、しのぎやすい。

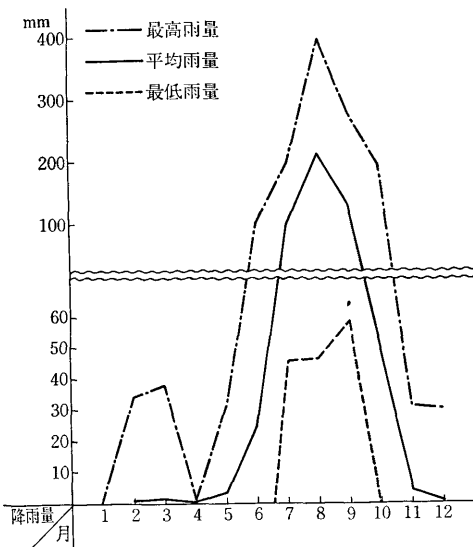


図3 リンゲールにおける降雨量
1934～1954年の期間について

サヘルは雷雨をともなった驟雨のように突然やってくることが多い。大粒の雨が短時間に集中して降る。野原のあちこちに小さな池となって表面水を形づくるが、雨があがるとその乾燥も早い。再び乾季にはいと夜の気温はかなり下り、最低温度の月間平均が12月、1月には 18°C 前後である。時には 10°C 以下に下ることもある。

次に降雨量についてみるとサヘル型気候帯は年間降雨量 500 mm の等雨線を中心とした帯状になっ

ている。やはりリングールでの降雨量を次に示す（表1、および図3）。

表1は1934年から1954年の21年間について示された統計である。年平均降雨量は533.9mmであるが、これはあくまでも21年間についての平均であり、表の最下欄に示したとおり、もっとも雨量の多かった年には853.6mm降っており、逆にもっとも雨量の少なかった年には204.7mmしか降っていない。このようにサヘル気候帯の雨量に関しては平均値はほとんど基準にならない。

また、1968年以降、1973年まで西アフリカのサヘル地域一帯で大旱魃がおり [cf. 中村 1980] 家畜のみならず、人々も飢えとかわきに苦しみ、死者が多く出たことは記憶に新しいが、セネガルも例外ではなかった。1969年から1977年までの雨量を示すと次のとおりである（表2、および図4、リングールでの観測）。

1969年に679mm降った後、1977年までの9年間に400mm以上降ったのは1975年だけである。1970年には297mmと落ちこみ、その翌年は328mm、続いて245mm、255mm、330mm、と5年間にわたって降雨量は少なかった。この9年間についての平均降雨量は370mmでしかない。1934年から1954年までの平均降雨量534mmに比すると大きな差である。

更に注意しなければならないのは、たとえ年間降雨量としてはかなりの量が降っていても、それが1回の雨季の間にどれだけ平均して降るかということである。Ⅲ章お

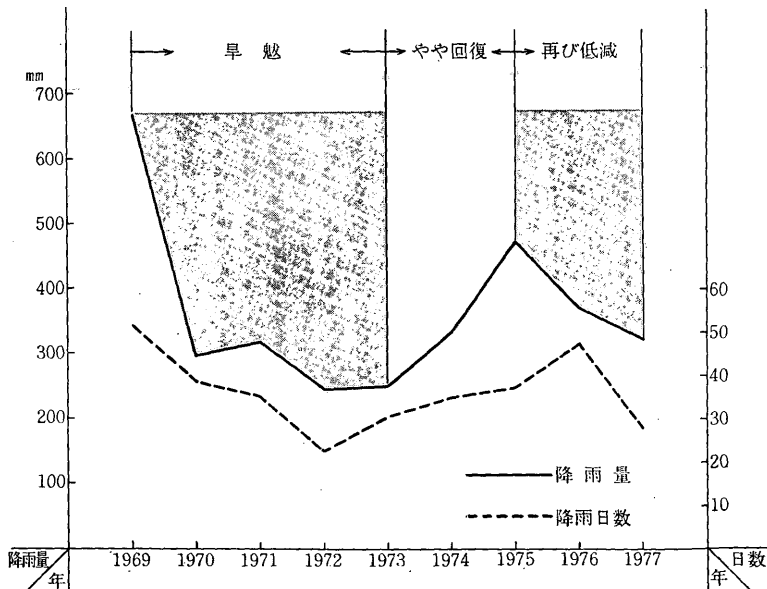


図4 リンゲールにおける降雨量の推移 (1969年～1977年)

表2 リンゲールにおける降雨量(mm), 降雨日数

(1969年～1977年)

月	1969		1970		1971		1972		1973		1974		1975		1976		1977	
	降雨量	降雨日数	降雨量	降雨日数	降雨量	降雨日数	降雨量	降雨日数	降雨量	降雨日数	降雨量	降雨日数	降雨量	降雨日数	降雨量	降雨日数	降雨量	降雨日数
1 月							7.2	1							2.6	2		
2 月															4.1	1		
3 月					0.3	1									0.2	1		
4 月															2.0	1	5.6	1
5 月	2.8	1			0.6	1							1.9	1			8.9	3
6 月	5.5	1	17.8	2	1.4	2	46.0	6			5.6	2	17.5	2	6.6	3	54.8	7
7 月	113.1	16	88.7	10	82.7	6	54.9	2	49.6	6	44.5	8	256.1	14	77.6	4	191.6	6
8 月	293.6	19	106.3	13	120.6	13	72.9	6	120.5	15	169.9	14	129.8	11	133.5	13	78.5	11
9 月	146.2	9	74.0	9	103.0	10	45.4	4	85.3	9	80.0	9	72.5	7	94.2	15		
10 月	117.8	6	8.2	3	19.2	1	19.0	4			30.0	2	1.1	2	51.7	4		
11 月			2.1	2	0.5	1									1.0	1		
12 月															5.2	2		
年合計	679.0	52	297.1	39	328.3	35	245.4	23	255.4	30	330.0	35	478.9	37	378.7	47	339.4	28

セネガル共和国, 都市計画・運輸・公共事業省, 気象部において与えられたもの。

よびIV章で詳しく述べるがサヘル地域での耕作は雨季の間だけにおこなわれる。雨季の間、3～4カ月に雨がならして少しずつ降れば問題はないが、往々にしてそのように順調には降らない。降る時は一度に大量に降り、その後2～3週間日照りが続くこともめずらしくはないのである。

また、空間的にみても多くの問題があり、雨は往々にして局地的である⁵⁾。30～40 km はなれただけで極端に雨量が異なることも稀ではない。ちなみに1971年、1972年の旱魃の際、リンゲールでは先の表に示すとおり、328 mm, 245 mm の量が降っているが、リンゲールから約80 km 北上した地点のフェテ・オレ村近辺では1971年に202 mm, 1972年に至っては33 mm とまさに大旱魃の状態になっている [POUPON 1976: 96]。

表1および表2によってわかるように、時に例外的に乾季の間にわずかながら雨が降ることがある。セネガルではこれは「マンゴーの雨」と呼ばれているが、この乾季の雨は決して良い結果をもたらさない。この地方では収穫した穀物は屋内ではなく、畑の中に木の枝を編んで作った穀倉にたくわえられる。乾季の間に雨が降ると穀倉に水がしみこみ穀物はその中で発芽し、腐るのである。したがって乾季の雨はマイナスの要因でこそあれ、プラスではない。

2. 植 物 相

一年のうち、3～4カ月の雨季だけに約400 mm 前後の降雨量しかないセネガルのサヘル地域では、草はその年最初の雨（7月半ば頃）が降ると同時に生えはじめる。そして雨季の終る10月半ばにはもう枯れはじめる。大地が草でおおわれるのは約2カ月半しかない。乾季の8カ月間は前年雨量の多かったところでは枯草にめぐまれるが、そうでないところは、しばしば地肌の露出した裸地に近い状態になり、そこにおおむね4～6 m の高さしかない中木を中心にした木々が生えている。木々は密生することではなく、疎林である。

植生について全体的な景観から特に目立つものを記すと次のとおりである。

高木（10 m 前後）としては *Bombacaceae* の *Adansonia digitata*, *Bombax costatum*, *Sterculiaceae* の *Sterculia setigera* などが所々に見られるが、サヘル地域では決して多いものではない。*Anacardiaceae* の *Lannea acida* も散見される。人々の話によると、かつてはかなり多かったがここ10年程で枯れたものが多いという。*Balanitaceae* の *Bala-*

5) やはりサヘル地域において主としてラクダ牧畜をおこなうトゥアレグ族はその諺に、「雨は普通、ウシの角1本をぬらし、もう1本の角はぬらさない。」という。雨が空間的にも大変不均一であることを端的に表わしている [cf. BERNUS 1979: 68]。

nites aegyptiaca, および *Leguminosae* の *Acacia raddiana* はかなりの高木になり、サヘル地域に多くみられる。

中木 (2~3 m から 6~7 m) として、もっとも目立つのは *Leguminosae* の木々で、*Acacia senegal*, *A. albida* などであるが、その他、*Combretaceae* の *Combretum micranthus*, *C. aculeatum*, *Guiera senegalensis*, *Tiliaceae* の *Graewia bicolor*, *Leguminosae* の *Bauhinia rufescens*, *Asclepiadaceae* の *Calotropis procera* などもかなり多い。

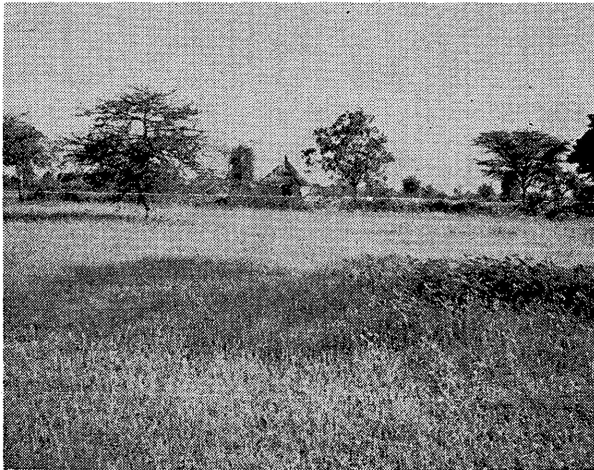


写真1 雨季の景観。手前右側に *Cassia tora*, その他禾本科の草が地をおおう。(1974年8月撮影)

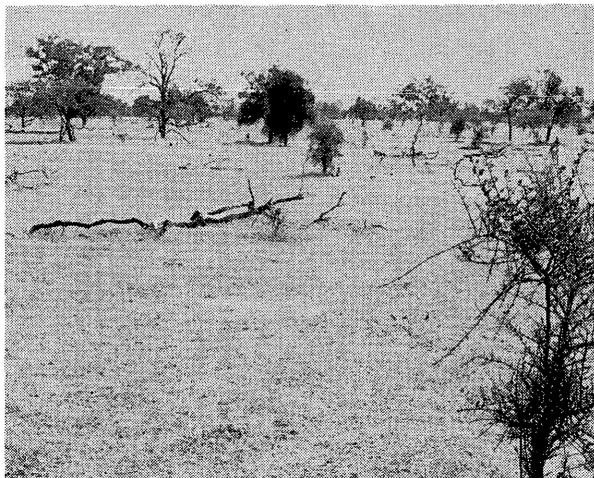


写真2 乾季の初め頃の景観。禾本科の草が枯れたまま残っている。手前右は *Balanites aegyptiaca* の幼木。(1979年11月21日撮影)

草についてみると、雨季の間にもっとも目立つのは *Leguminosae* の *Cassia tora* であるが、雨季があけると *C. tora* は小さな池ができていた付近では背高くのびているが、それ以外の所では枯れてしまう。雨季があける頃、*Gramineae* の *Cenchrus biflorus*, および、*Eragrostis pilosa* が目立つ。その他、やはり *Gramineae* の *Aristida longiflora*, *A. stipoides* なども多い。

その他、地をほう植物として *Anacardiaceae* の *Heeria insignis*, *Euphorbiaceae* の *Phyllanthus niruri*, *Convolvulaceae* の *Jacquemontia tamnifolia*, *Leguminosae* の *Crotalaria perrottetii*, *Asclepiadaceae* の *Leptadenia hastata*, *Zygophyllaceae* の *Tribulus terrestris* などがある (全体的な景観として写真1, および写真2を参照)。

3. 人々と家畜

この章の最後にこのリングェール県に住む人々と家畜について簡単に記しておこう。リングェール県とは現在の行政区分のひとつであるが、かつてこの地方にあったジョロフ王国の中心部分とだいたい同じであり、総面積は 19,726 km² である。現在リングェール県は四つの郡 (Arrondissements) にわけられ、更にその郡が1978年以来、複数の農村共同体 (Communautés rurales) に分けられている。各郡の面積、および1978年~1979年におこなわれた調査にもとづく人口統計は次のとおりである (表3)。

表3 リンゲール県各郡の面積、人口 (1978~1979年の調査)

郡	面積	人口	住民構成 (%)	km ² あたりの人口密度
Barkeedji	7,350 km ²	24,690人	フルベ族 60% ウォロフ族 38% その他 2%	} 3.36人
Dahra	3,012 km ²	57,837人	ウォロフ族 71% フルベ族 24% その他 5%	
Dodji	5,150 km ²	18,505人	フルベ族 53% ウォロフ族 40% その他 7%	} 3.59人
Yang-Yang	4,214 km ²	19,398人	ウォロフ族 50% フルベ族 48% その他 2%	
リングェール県全体	19,726 km ²	120,430人	ウォロフ族 50% フルベ族 46% その他 4%	6.11人

リングェール県庁において与えられた数字から計算したものの。

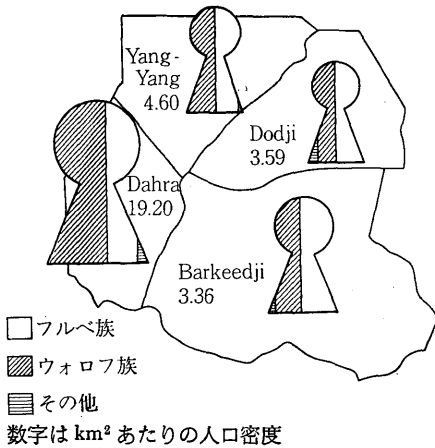


図5 リンゲール県全図と各郡の人口構成

リンゲール県全体をみた場合、農耕を主とするウォロフ族が50%を占め、牧畜を主とするフルベ族は46%、その他の人々が4%となっている。その他の人々とはモーリタニア国からきたモール族（主に商業にたずさわる）、そしてセレル族、サラコッレ族、トゥクルール族（いずれも農耕が主）などの人々である。

現在ではリンゲール県においてもウォロフ族はフルベ族を数的に上まわっている。これは今後考察の対象とすることであるが、比較的新しい現象であり、特

に今世紀にはいってからウォロフ族は急激に増えている。ちなみに1960年の時点についてみると、リンゲール県⁶⁾の人口はわずか45,000人と推定されており、しかもそのうち75%がフルベ族、ウォロフ族は20%と算定されている [MONTEIL 1966a: 116]。1957年の時点で、すでに Grenier は次のように述べている。「ジョロフ地方（リンゲール県）にいるフルベ族の居住範囲とは未だウォロフ族に占有されていない地域のみといった方がよい」 [GRENIER 1957: 35, 127]。つまり、年々ウォロフ族が耕地を広げるため、フルベ族の居住域は次第にせばめられているというのが現状である。特に、ダーラ郡は他の郡に比して面積はもっとも少ないながら、人口は格段に多く、平方キロメートルあたりの人口密度は他郡のそれに比して4倍から5倍以上となっており、その7割がウォロフ族の人々で占められている（図5参照）。

フルベ族の老人達と話していると往々にして「昔は雨がよく降ったし、それに人も家畜も今よりずっと少なかった」ということを耳にする。ここ10年程の降雨の少なさを考えれば、かつては雨がよく降っていたことはたしかに事実である（表1, 2を参照）。また人の数が年々増加していることも明らかである。家畜の数はどうであろうか。

1950年に Bonnet-Dupeyron によってなされた調査にもとづくところジョロフ地方のウシは人口100人に対し平均して114頭～172頭とされている [BONNET-DUPEYRON 1951]。1人あたり、1頭から2頭の範囲である。それに対し1970年になされた調査に

6) セネガルの独立は1960年4月であり、独立以前はリンゲール県 (Département de Linguère) は Cercle de Linguère とよばれていた。

もとづくとしリンゲール県のウシの数は296,000頭に達している [VALENZA and DIALLO 1972: 66]。仮に、先に述べた1978年～1979年の人口、120,430人をもとにして考えると人口100人に対し、ウシは245頭となる。1人あたり2頭半であり、すでに1950年に比して増えている。しかも、現在の総人口120,430人のうちウォロフ族が50%を占めており、ウォロフ族は農耕民であるからウシを所有しないと仮定して計算すると、フルベ族(46%, 55,398人)は人口100人に対し534頭、つまり1人あたり5頭以上を有していることになる。

ただし、ここにあげた数字は先述のとおり、ウシの数については1970年のもの、人口については1978～1979年のものとズレがある。1970年前後の早魃においてウシの数は相当減ったと考えられ、上記の計算による数字は正確なものとはいえない。しかしながら、たしかに人口に対してウシの数が相対的に増えていることはうかがえる⁷⁾。

このようにフルベ族の人々はできるだけ多くの家畜をもつことを常に願っている。この点に関し、牧畜民が牧草面積を考慮することなく、常により多くの家畜を所有しようとするのは非合理的であるとして非難する見方があった。つまり、家畜を威信財としてむやみにふやすより、順次売ることによって経済の循環を早めた方がよいとするものである。しかし、この考え方は近代産業としての家畜飼養の観点からのみなされたもので、フルベ族をはじめサヘル地域に住む牧畜民の基本的な生計維持機構を理解していない見方であるとして反論されている [BONTE 1975: 63-64; SWIFT 1975: 95; RUDDLE 1979: 828]。つまり、フルベ族を例にとると、彼らにとって生計維持の基本は乳である。だが、このことは彼らの食生活が乳だけで構成されていることを意味するものではない。彼らは穀物も多く摂取する。しかし、後に述べるが彼らは年間に必要とする穀物を自給しうるものではなく、不足分の穀物、茶、砂糖など日常必要とする食料は交換、あるいは購入によって手に入れなければならない。その際の原資となるのが乳だということである。フルベ族は生乳から酸乳、及びバターをつくるがチーズはつくらない。バターは数週間は保存しうる。しかし、生乳、及び酸乳は何週間も保存しうるものではない。しかもバターは乳が大量にあるときのみつくられるものである。したがって彼らにとって基本的食料の長期保存ということは不可能に近い。そのことからして、もっとも確実な食料保存の方法は生きた家畜を少しでも多く所有することである。こうしておけば食料(乳、穀物)が不足した時、余分の家畜を売ることによって穀類を購入することができる。Swift はラクダ牧畜民のトゥアレグ

7) 1967年～1968年になされた調査(リンゲール県、畜産課による)にもとづくとし、リンゲール県全体の家畜の数は次のように算定されている。ウシ：300,000頭、ヒツジ・ヤギ：175,000頭、ウマ：7,500頭、ラクダ：1,250頭、ロバ：9,000頭 [TOURÉ 1969]。

族について次のように述べている。

「(上記のような家畜の)蓄積は往々にして威信財としての動物を少しでも多く所有したいという非合理的な欲求にもとづいているといわれることがあるが、しかし、この家畜の蓄積とは実は不安定な自然条件に対するトゥアレグ族の対抗戦略なのである」
[SWIFT 1975: 95]。

実際、サヘルという気候の不順な地域においての牧畜には常に多くの危険がつきまとう。旱魃、病害など家畜を大量に失うという事態がいつでもおこりうることを考えれば、彼らが常により多くの家畜を所有したいと願うのは理解される。

Ⅲ．季節暦と活動のサイクル

フルベ族は1年、つまり月暦で12カ月にわたる期間について *hitaande*/(複) *kitaale* という言葉をもっているが、これは月が12回めぐってくる期間、つまり一定の長さの時間を表わす概念用語であって周期を表わす言葉ではない。1年ごとの周期を表わすのは「雨季」という言葉、*ndunngu*/(複) *duubi* である。個人の年齢は自分が今までに何回の雨季を経験してきたかということではかられる。個人は自分の年齢をいう場合、*duubam ko*~ という。これは「私の“雨季経験回数”は何回です」という意味にあたる。ここで *kitaale* という言葉が使われないのはそれまで自分が生きてきた時間が一定量の長さとしてとらえられているのではなく、雨季を何回繰り返したかという周期の総体としてとらえられているからである。

セネガル、ジョロフ地方⁸⁾に住むフルベ族においては年間の季節は大きくふたつに分けられている。雨季と乾季である。

1年を通して 400 mm 前後という少ない降雨しかないこのジョロフ地方にとっては、雨季、*ndunngu* のもつ意味は上記の例からもわかるとおり重大であり、雨季に農作業が集中するのはもちろんのこと、社会生活という観点からも雨季、およびその前後に凝集度が高くなる。

ジョロフ地方のフルベ族は恒常的な村を構成しているが、村人総てが村にいるのは雨季の期間についてのことであって、雨季がおわるとともに多くの人々は自分の村をはなれ、家畜のための水と草を求めて離散する。フルベ族にあっては1年は雨季の集合と乾季の離散との繰り返しであると特徴づけられよう。

8) すでに述べたとおり現在の行政区分上はリンゲール県とよぶのが正しいが、実際にはジョロフ、Jolof とよばれることの方が多く、本稿でも以降この呼び名を使う。

さて、1年は雨季、*ndunngu* と乾季、*ceedu* のふたつに大別されているが、その大きくわけられた季節が移行する時に微妙な天候の変化をとらえて更に四つの短い季節分けをしている。乾季が終りに近づく6月の後半頃を *demmunaare* とよび、雨季にはいる直前の2～3週間を *selselle* といっている。また、10月の半ば頃、その年最後の雨が降る前後の時期は *kawle* とよばれているし、その後、本格的な乾季にはいる直前2週間ぐらいは *dabbunde* とよばれている(図6)。以下に各季節の特色と主な活動を概略、記しておく。

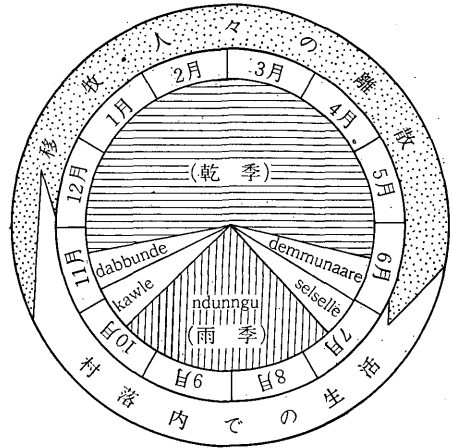


図6 ジョロフ地方フルベ族の季節暦

1. *ndunngu*

初めての雨が降ると野原には草が芽をふく。しかし、1回目の雨の後にトウジンビエ、*Pennisetum typhoideum* の播種をする人はむしろ稀で、普通は2回目の雨を待った後におこなう。先に述べたとおり、サヘル地域の雨は決して一定したものではない。播種後、順調に雨が降れば問題はないが、雨が2週間もとだえると種は枯れ、次の雨の後ふたたび播種しなおさなければならない。

次章で述べることであるが、ジョロフ地方のフルベ族は彼らの食生活の基盤となる穀物、トウジンビエのほか、わずかながら落花生、*Arachis hypogaea*、主に調味料として使われるローゼレ、*Hibiscus sabdariffa*、そしてササゲ、*Vigna sinensis* を栽培する。

雨季の間、村の人々は農作業に全力をあげる。雨のおかげで牧草の量は一挙に増し、また野原の各所に雨水がたまり、表面水がたやすく得られるため家畜の飼料、水については心配はなく、家畜の放牧管理は15～6才の青年にまかせておけるからである。牧童は村から4～5kmの範囲で日帰り放牧をするが、主な注意は家畜が耕作地にはいり、耕作物を荒さないことの方にむけられる。フルベ族では搾乳は伝統的に女の仕事であり、朝、夕の2回、乳がしぼられる。1日の収量は1頭あたり2～3リットルである。

2. *kawle* および *dabbunde*

降雨が順調であれば10月の上旬にはトウジンビエの収穫がはじまる。この収穫の時期を *kawle* という。雨が終わりに近づき、表面水も干上りはじめる頃である。この時期、牛は十分な乳を出し、新しく収穫したトウジンビエも豊富であり、1年でもっとも「富裕」な時期である。あちこちの村で結婚式が多くおこなわれる。この時期こそ社会的凝集度のもっとも高い時とってよからう。

11月にはいり、朝、夕の風が冷たく感じられるようになると *dabbunde* である。表面水は完全に干上り、農作業もおわって、人々の関心は家畜に集中する。家畜の飼料、水が重大な問題になってくる。

3. *ceedu*

いよいよ草も枯れ、飼料が少なくなってくるとフルベ族の人々は多くが移動をはじめ。けれども村人総てが移牧することはなく、普通は老人、および何人かの壮年も村に残る。200 km 近くも南下した Sine-Saloum 地方にゆく人、西よりの Baol 地方に行く人、そして同じジョロフ地方の中で短距離の移動をする人もある。この点についてはV章で詳述する。

4. *demmunaare* および *selselle*

乾季から雨季への移行期である。大半の人々は移牧していた土地から村に帰ってきている。家畜は疲れているが飼料となる草は未だ生えておらず、家畜はこの時期にもっともやせている。乳も収量は皆無に近い。

IV. 雨季の農耕

牧畜民フルベ族にとって農耕は彼らの主要な関心事ではない。しかしながらジョロフ地方に住むフルベ族は、彼らの食生活の基盤を牛乳とならんで一方ではトウジンビエにおいており、その耕作はすでに彼らの生業の一部になりきっている。もともと農耕民ウォロフ族、あるいはセレール族との接触によって得た技術であろうことはたしかであり⁹⁾、そのことは農耕に関する用語の多くがウォロフ語からの借用であることにも看取される。現在、フルベの人々は口では牧畜業は土地にしばられず自由であるといい、一カ所への定住を余儀なくされる農耕民を軽蔑したようなことをいうが、一方ではフルベ族の伝統とは牛の牧畜とトウジンビエの耕作であるというほどまでにな

っているのである。

まず主要農作物について概観し、ついでトウジンビエの耕作について記したい。

1. 主要農作物

(1) トウジンビエ, *Pennisetum typhoideum*

ジョロフ地方で栽培されるトウジンビエは土質が粗く、砂の多い土地で、また、少量の雨でも育つ早生のものである。粒の大きな *Sorghum* はより多くの水を必要とするし、土質という点からも砂地には適さない。更に、播種から収穫までの時間が長くかかり、雨季が3~4カ月しかないジョロフ地方では育たない。

トウジンビエの調理法については別に記すつもりでいるが、おおむね臼と棒杵で搗いて細かい粉状にしたものを蒸し煮にし、それに牛乳をかけて食する。また、トウジンビエは保存食料としても利用されており、これは一度蒸し煮にしたものを天日で干し、皮袋にたくわえておく。これには酸乳（と砂糖）をかけて食べる。3~4週間の保存が可能である。

(2) 落花生, *Arachis hypogaea*

ジョロフ地方のフルベ族が落花生を栽培しだしたのは極く最近のことである。現在の老人達が若かった頃から落花生を栽培する人がでてきたという。現在でも妻、および子供が多く、余力のある人がおこなう程度である。換金作物として栽培されるものであり、食生活に占める割合は大変少ない。しかしながら、落花生はその葉、および茎が家畜の飼料として役立つ。

(3) 補助的農作物

栽培される量は極く僅かであるが、上記の他にローゼレ, *Hibiscus sabbdariffa* およびササゲ, *Vigna sinensis* が女性の仕事として栽培されている。ローゼレは主にその葉を煮て調味料として使われている。ローゼレの葉は酸味があり、ビタミンCの補給になっている。ササゲはそれだけを塩味で煮た後に練りつぶし、それにバターをかけ

9) 今世紀初頭、Capitaine Vallier がジョロフ地方からさらに東部の半砂漠のフェルロ (Ferlo) にかけて踏査した記録を読むと、ジョロフ地方のフルベ族はすでに農耕をおこなっていたことが記されている。Vallier は次のように記している。「かつては彼ら（フルベ族）は牧畜だけをおこなっていた。今日では彼らは半農半牧の生活をしており、固定した村の近辺で耕作をし、同時にいたるところで放牧をしている」[VALLIER 1905: 187]。畑の耕作にかかわる用語にウォロフ語からの借用が多いことから筆者はフルベ族における耕作を新しい技術として導入されたものとするが、いつ頃からフルベ族が耕作をするようになったかは不明である。ただ、畑に相当する語、*ngesa*/(複) *gese* はその起源はいかなるものであるにせよ、フルベ族はこれをフルベ語であると明言しており、したがって、フルベ族はかつて農耕は一切おこなわなかったと断定することには疑問が残る。

て食べることもあるが、多くは米にまぜて煮たり、あるいはトウジンビエを食べる際のソースにまぜて使われることが多い。牛乳の少ない乾季の重要なタンパク源になっていると思われる。なお、米は市場で購入されるものであるが、都会風の食物として好まれ、最近では昼食にほとんどの場合米が食べられている。

上記の栽培作物のほかには野生植物ももちろん利用されている。付記しておくとしてスイカ¹⁰、*uulo* とよばれる草 (*Cassia tora*)、そしてバオバブ (*Adansonia digitata*) の実や葉などが主だったものである。

2. トウジンビエの耕作

トウジンビエの播種、育成、収穫は主として男の仕事である。トウジンビエの耕作は播種後、雨さえ順調に降れば農作業としてはそれほど手のかかるものではない。ただ、雨のたびに雑草が芽を出すので、この雑草の除去が主作業である。男達はほとんど毎日除草作業に従う。除草にはフルベの人々が *goppu* とよぶ長柄の手押し鋤が使われる。この手押し鋤は西アフリカの半乾燥地域ほとんど全域で使われている代表的な農具であるが、詳細についてはすでに記した [小川 1979a: 361-362]。

9月から10月にかけて、つまりトウジンビエが完全に成熟して収穫しうようになるまでの期間は端境期のもっとも苦しい時期であり、現在でこそ人々は現金で米やトウジンビエを市場で買うことができるが、貨幣経済が一般化する以前人々はこの時期に飢えに苦しんだという。老人達によるとこの時期には牛乳とバオバブの実しかないというのが普通であった。また、トウジンビエが完全に成熟するのを待ちきれず、次のような工夫をして収穫を早めた。

未だ完熟はしていないトウジンビエの穂を刈りとってくる。地面に穴を掘り、そこに木の燃えさしと一緒に枯枝を集めて入れ、穴を熱する。穴が熱せられたところで新鮮な木の葉のついた枝を底にしき、その上に刈りとったトウジンビエの穂を縦にふたつ割りにした状態で積んでゆく。穂を穴の中に積みあげてゆきながら、穴の底に残っている燠を吹いて火熱を強める。そして時々トウジンビエの穂をかきまぜて全体が乾くようにするのである。つまり、完全に熟成しきっていないトウジンビエの穂に人工的に熱を加えて熟成させ食用に適するようにするものである。この熟成法は *urdugal* とよばれており、現在では壮年以上の人々でないと知らないやり方である。

順調にゆけば10月上旬から半ば頃、トウジンビエの収穫がおこなわれる。トウジン

10) スイカ, *Citrulus vulgaris*, はもともと野生のものが利用されているが、農耕民のウォロフ族はこれを栽培しており、栽培物の方が大きい。

ピエは収穫時には 2 m を超す丈になっており、穂の部分は最大径で 3 cm、長さは普通 40 cm 前後、大きいものになると 60~70 cm にもなる。刈り入れに際してはトウジンピエの茎の根元から切るのではなく穂の直下の部分を切る¹¹⁾。道具としては *ngoobaan* とよぶ手包丁が使われる。この手包丁も先の手押し鋤同様、セネガルだけにみられるものではなく西アフリカの半乾燥地域に広く分布した農具である [KAWADA 1975: 18]。

茎の部分は畑に放置し、そこに家畜を放し、飼料とする。しかしながら最近ではウォロフ族のやり方になって茎の部分を根元から切り、束にした後、畑の中で焼く人もある。灰が翌年の耕作のための肥料となるからである。

さて、刈りとったトウジンピエの穂はそのつど小さな小山にまとめておく。全部の刈り取りがすむと、やはり畑の中に場所を定め、4本の杭を打ちこみ、その上に枝木を渡し棚状にすると、その上に収穫した穂を積みあげてゆく。これを *cahali* とよぶ。*cahali* の大きさは収量の多寡によって当然異なるが普通 2 m × 4 m ぐらいのものが多い。*cahali* 作りは仮の作業であって、最終的には *sak* とよぶ穀倉をつくり、その中にトウジンピエを貯えておく。*sak* を作るにはまず地面に1本の棒を立て、その棒に適度な長さの紐 (1.5 m 前後) の一端を結びつけ、他方を手にもち地面に線をひきながら棒のまわりを一周する。その後、地面に描かれた円形の線上に 30 cm ほどの間隔で棒杭を何本も立てる。棒杭の高さは 2 m 前後に達する。そうした後、*gelooki* (*Guiera senegalensis*) とよぶ木の細枝を大量に集め、棒杭の間を縫うように交互に通しながら編みあげてゆく。こうして上下に穴のあいた大きな筒ができあがる。これを先の *cahali* の台座にのせ穀倉とするのである。屋根は作ることもあるし、あるいはトウジンピエの茎部を何本も束ねてのせ屋根代りにすることもある。*sak* の中ほどの高さには窓をつくり、そこからトウジンピエの穂を抜きとる。*sak* 作りは男の仕事であり、近い親族の者、数人が共同して作る。*sak* の大きさは直径ではなく、両手をひろげて周囲をはかり、外周の長さで表わされる。ジョロフ地方のフルベ族にあっては周囲 3 尋程度の大きさが一般的である。

さて、このようにジョロフ地方のフルベ族は雨季におけるトウジンピエの耕作を自分達の生業の一部にとりいれてはいるが、しかし、これだけの収量で翌年の雨季まで

11) このことに関し、以前、トウジンピエはまず根元から切り、ついで穂を刈り取ると誤って記した [小川 1979a: 364]。これは後にも記すとおり、収穫後、茎部を根元から切り倒すことがあり、そのような状態の畑地で私が誤った情報収集をしたことにもとづいている。この機会に訂正させていただきたい。

一家が食べてゆくのに十分であるわけではない。*sak* に貯えたトウジンビエは収穫後3～4カ月ももてばよい方である。後に述べるように *sak* の中のトウジンビエが少なくなってくる頃には、フルベ族の人々は家畜をとめない乾季の間の移牧地に移動してゆくのである。

これまで、トウジンビエの播種から収穫、貯蔵に至るまでの過程を順を追って記してきたが、耕作地そのものについて農耕民ウォロフ族と比較しながら検討しておこう。

新しく畑地として開墾した土地を *sonjaan* という。ウォロフ語からの借用語である。それに対し、すでに畑地として利用している土地に牛糞をもって肥料とし、翌年も再びそこを畑地として利用しうるものを *biitngal* とよぶ。これはフルベ語である。開墾地についてはウォロフ語が使われ、再利用地にはフルベ語が使われるというところに牧畜民としてのフルベ族の基本的な性格があらわれている。

つまり、砂の多い、したがって地味のうすいこのジョロフ地方にあって農耕をするためには、数回の耕作の後、地味の乏しくなった場所を捨て新しい畑地を開墾するか、あるいは畑地に毎年施肥することによって地味を回復させるかしなければならない。農耕民ウォロフ族は家畜はロバ以外ほとんどもっておらず、したがって牛糞による施肥はすることができない。そのためウォロフ族の人々は常に耕作地を広げるか、あるいは広大な耕作地の中で利用地を順に移動してゆくかして地味の衰退を補償してゆかねばならない。つまり、*sonjaan* (開墾地) を常に作るわけである。それに対し牧畜民フルベ族の人々は一度開墾地を作れば、収穫後その畑地に家畜を集中的に放すことによって牛糞による施肥をおこなうことができる。*biitngal* (施肥にもとづく再利用地) を常に自分が居住する場所の近くにもつことが可能である。このことによって *biitngal* という言葉がまさに牧畜業を基盤とする人々の間に生じたものであることが理解される。

更にこのように基本的な生業形態を異にするふたつの部族の人々があい接して住んでいることから、両者間に種々の抗争が生れているのも事実である。

農耕民ウォロフ族は先に述べたとおり年ごとに耕地を広げる。耕地の拡大はそのまま牧草地の減少となる。一方、II章で述べたように少しでも多くの家畜を所有することを第一義に考えるフルベ族にとってウォロフ族の耕地拡大はまさに脅威である。逆にウォロフ族にとってはフルベ族が牛を放牧する場所こそ開墾に適している。牛糞によって地味がこえていると考えるからである。

また、ウォロフ族の人々は自分が所有する畑に垣根をつくって作物を守るとい

とをしない。作付面積が大きく、垣根を作るのは困難だというだけでなく、上にのべたように農耕民は頻繁に畑地を移動する必要がある、そのたびに垣根をつくることは不可能なのである。逆にフルベ族は自分達の畑に垣根をつくり家畜にあらされないようにする。基本的な生業は牧畜である彼らの畑は農耕民のそれに比べて小さいし、更に上に述べたとおり畑地を移動する必要がないからである。彼らは垣根用に *golteeki* とよぶトゲのある木 (*Balanites aegyptiaca*) を畑地の周囲においておく。

このようにウォロフ族の畑地には垣根がないことから、フルベ族が放牧する家畜が畑地に入りこみ耕作物を荒らすことが頻繁におこる。深刻な抗争をひきおこす原因である。

V. 牧 畜

フルベ族が雨季の間の農耕を自分達の生業の一部にとりいれながらも基本的には伝統的な彼らの生業である牧畜に生活の基盤をおいていることはこれまでも述べてきた。

彼らかもつ家畜はまずウシである。ウシこそ彼らの生活を支える家畜であり、経済的な財物であるのみならず、彼らの精神生活にも大きな影響を与える存在である。フルベ族が飼っているウシは一般にゼブとよぶ *Bos indicus* である。弊死したウシは食用にされるが、食肉を得る目的でウシを屠ることは決して多くない。必ずウシを屠らなければならないとされるのは次のような機会だけである。まず、結婚式に際しては、結婚する男の父親が牡ウシを一頭、ついで長男の誕生後、命名式に際して、やはり牡ウシを一頭、そして家長の死に際して、その人の所有であった牡ウシを一頭、屠らなければならないとされている。

ウシとならんで多く飼われているのはヒツジ、ヤギである。これらは補助的な家畜であって、ヒツジ、ヤギの飼育自体に主力がおかれているわけではない。しかしながら、ウシ、ヒツジ、ヤギそれぞれに必要な飼料、出産期などは異なり、補助的家畜を所有することによって環境をよりトータルに利用しているといえる [cf. RUDDLE 1979: 827]。特にヒツジはウシを殺さずに手軽に食肉を得ることができるという点で有用であるし、皮は売ることもできる。ヒツジ、ヤギともに搾乳することはあるがウシの乳が少なくなる乾季の代替食品という意味合いが強い。

上記のほかにウマ、ロバ、ニワトリを飼う人々が多い。ウマは大変重視される家畜である。購入時に高くつく動物であり、一種の富の外的象徴としてみなされているよ

うである。かつてはウマは強力な武器としてその威力を発揮したのであり、フルベ族の人々は他部族のウシを掠奪したり、あるいは奴隷を捕奪する時にウマを最大限に活用した。現在でも騎乗用、荷車の牽引用として使われている。

ロバは荷駄獣として使われている。村から遠く離れた井戸に水汲みに行く際に使われるし、乾季の移牧の際、荷物の運搬用として重要な働きをする。

ニワトリはごく普通に飼われているが、フルベ族はこれを家畜とみなしていない。家畜のことを *jawdi* というがニワトリは *jawdi* の範疇には含まれていない。しかし、ニワトリは家畜（ウシ、ヒツジ、ヤギ）を殺さずに手軽に肉を得るためのものとして重宝なものである。ニワトリの卵は普通、食用にしない。

そのほか、イヌは放牧の際重要な動物であり、ネコも村の中で飼われている。イヌ、ネコとも家畜とはみなされていない。

さて、この章ではジョロフ地方のフルベ族が雨季の間どのように放牧をするか、雨季から乾季への移行期における水の問題、そして乾季の間の移放の形態について記述したい。

1. 雨季の放牧

雨季の到来とともに草が芽をふく。乾季の移牧地から長い道りを歩いてきたウシは疲れている。本来、雨が降るべき時期に雨の到来がないことを *hokkere* といい、フルベの人々は *hokkere* が長く続くことをもっとも恐れる。この地方に住むフルベ族はウシの出産時期に関する管理は全くしない。牧草、水ともに豊かなのは1年のうち3～4カ月しかなく、牝ウシは雨季の後半から終り頃に発情するだけだからである。牝ウシの妊娠期間は9カ月であり、したがって毎年6月から7月頃に出産する。これは雨季の初め、牧草は未だ少なく乳の出が悪い時期にあたる。

この頃、つまり乾季から雨季に移行する時期を *demmunaare*、ついで *selselle* とよんでいることは第三章に記したが、*selselle* の頃、ジョロフ地方の内部で家畜を伴った短距離の移動がしばしばおこなわれる。フルベ族は家畜を伴った移動、移放のことを一般に *eggirgol*（居住場所を変える、の意）という動詞で表わすが、この雨季直前の短距離の移動については、その季節のよび名をもとにして *selselloyaade* といっている。

サヘル地域の降雨は時間的にも空間的にも不規則である。わずかの距離をはなれただけで降雨量が異なることもよくある。*selselle* の頃、自分達が住む村の近辺には雨は降っていないが、20～30 km はなれた所にはかなりの降雨があり、各所に小さな池

ができてのみならず、牧草も芽を出しているというような情報がはいると若者達は躊躇することなく *selselloyaade* をおこなう。この場合、移動させられる家畜はウシが中心であり、また、人も家族全部が移動するのではなく20才前後の男子のみである。20~30 km の距離であれば家畜の群をつれていても1日で簡単に移動できる。若者達としては自分達の村にいて井戸の水を汲み家畜に飲ませるより、家畜とともに移動する方がはるかに楽である。*selselloyaade* はせいぜい1~2週間の短い期間についてなされる。また *selselloyaade* は完全に降雨の状況に依存するもので時間的にも空間的にも一定した規則はない。

雨季の初めにおこなわれる *selselloyaade* とならんで、雨季の終り頃にも同様の短距離移動がおこなわれる。それは自分の村の近辺ではすでに雨が上がり、各所でできていた池も涸上がった状態になってはいるが、少し離れたところに移動すれば、まだ池が残っているというような場合である。これについてもその時期をあらわす季節の名をもとにして *kawloyaade* といっている。やはり牧童の若者とウシだけが移動するものである。

雨季の間の放牧そのものはそれほどむずかしい技術は要しない。普通、家長のウシ、その妻および子供達が独自に所有するウシ、そして家長の両親に属するウシなどがひとつの群にまとめられ管理される。ひとつの群を構成するウシの数は人によって差があるが一般的には70~80頭から100頭前後である。

日の出前後に女達が搾乳をすませる¹²⁾。牧童の少年は前夜の夕食の残り、あるいは保存食であるトウジンビエの乾燥粉に牛乳をかけた食事をすませると水筒と棒だけをもって放牧に出る。牧草の豊かな雨季の間はそれほど遠くまで行く必要はなく村から5 km ぐらいの範囲を動く。しかし、牧童は昼食にもどることはなく、日没時、家畜とともに村に帰ってくるまで食事はしない。これを *pudal e mutal* (日の出から日の入りまで) といっている。仔ウシは村に残されている。夕方、ウシが帰ってくると再び搾乳される。ウシは普通、*geddu'* とよぶ柵の中に入れて夜を過ごす。搾乳も *geddu* の中でおこなわれることが多い。仔ウシは *tiggal* とよぶ立ち木を切り倒したものに結びつけられているが、搾乳する場合、まず仔ウシを *tiggal* から解き放し母ウシのもとにゆかせ乳を吸わせる。催乳である。少し乳を吸わせた後、乳房から引き離し、母ウシの右前足に仔ウシの首をしぼりつけ固定する。その後、女は必ずウシの右側にしゃがみ、膝の間で木の容器、*birdugal* を支え両手で乳をしぼる。その際、四つある乳首のうち右前方の乳首から搾りはじめなければならないとされ、乳首を一般に *enndu* と

12) 誰がどの牛を搾乳するかというのは重要な問題であるが、別稿にゆずる。

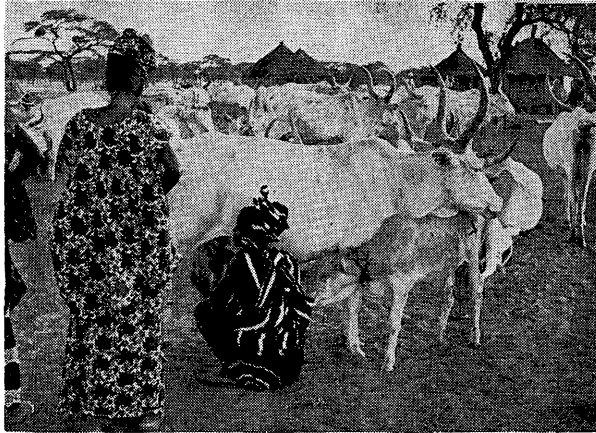


写真3 朝の搾乳をする女。この村では *geddu* (柵) は作っていない。(1979年10月20日撮影 Pambiにて)

いものに対し、右前方の乳首だけは *naatirdu* (まずそれをもって初めとするもの) とよばれている。少し搾った後、指を *birdugal* の中に入れ乳でぬらし、それから本格的にしぼられる。

2. *kawle*, *dabbunde*, そして *ceedu* の初め頃

雨季が終りになると牧畜民としての仕事の量は一挙に増加する。飼料としては枯草があるが家畜に与える水が重要な問題となる。フルベ族の人々はウマ、ロバには毎日水を与え、ウシ、ヒツジは1日おきでもよいが井戸が遠くなければできるだけ毎日与える。ヤギは2～3日おきに水を与えてもよいという。ウシは普通1日20lほどの水を飲む。枯草をたくさん食べた時には30lの水を飲む。

ジョロフ地方には川はなく、したがって水は総て井戸で汲みあげられる。(a) 伝統的な浅井戸、(b) 掘り抜き井戸、(c) 1930年頃から植民地行政府によって作られた深井戸、(d) 牧畜民定着化政策の一環として1948年以降つくられた動力ポンプによる取水施設、などが現在ジョロフ地方でおこなわれる取水法であるが、それら各々の問題点については別稿に記した¹³⁾。

3. 乾季の移牧

雨季の初め、および終り頃におこなわれる短距離の移動については先に記した。これは単に牧草の量、および雨水による池の存在の有無によって決定されるもので男の

13) 『季刊民族学』第14号に寄稿。

若者達だけによってなされるものであった。

乾季, *ceedu*, にはいるとジョロフ地方のフルベ族は家族の多くを伴ない長距離の移牧をおこなう。この移牧は11月の中頃から翌年7月頃まで7~8カ月という長期に及ぶものである。この移牧についてフルベの人々は単に *eg-girgol* (居住場所の移動), あるいは乾季のそれという意味で *ceedoyde* という言葉で表現する。

乾季の移牧, *ceedoyde* は家畜の飼料, および水を求めてという意味ではどの人々にとっても共通であるが, その内容についてみると家畜を媒介にした経済活動という観点からは移牧する人それぞれの間に違いがみられる。そしてその差異は移牧に向う場所がどこかと

いうことに密接に結びついている。その詳細について述べる前にフルベ族の移牧がどのようにおこなわれているか一般的な特徴をまず記しておこう。

移牧は村の人々が総出で, 総ての家畜を伴なってなされるのではない。一般に牧畜民に共通してみられる傾向として個人主義的であるということがいえるが [MONOD 1975: 39; 福井他 1980: 57], フルベ族もそうであり, たとえば移牧についても各家長の自由な判断にもとづいてなされている。移牧に出るか, あるいは乾季の間も村に残るか, 移牧に出る場合の出発の時期, 行き先などについて村全体の次元で意志決定されるのではない。ある人は妻, 子供を伴ない 200 km も離れた場所に行き, 別のある人は同じジョロフ地方内でより多くの枯草と動力ポンプ施設のある所に短距離の移牧をおこなう。しかしながら一般的には近い親族の者同志は近くにいた方が便利であり, 移牧についても同じ村の人々は同一の地域に移牧にゆくというケースが多いようである。それは特に遠く離れた移牧地に向う場合に顕著にみられる。

移牧につれ出される家畜はまずウシであり, ついでヒツジである。ヤギはつれてゆかれることもあるが往々にして村に残る老人のもとに残しておかれる。ウマは男の騎

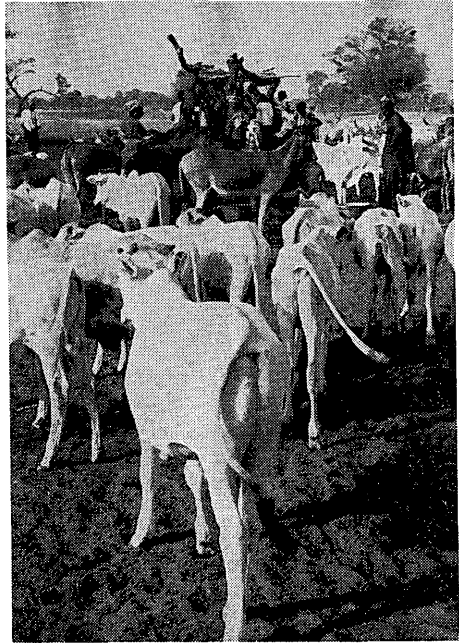


写真4 雨季あけ, 井戸での水汲み。井戸のヤグラは常設であるが, ツルベや輪は各個人ごとに持ちより自分で設置する。(1979年11月28日撮影 Denjillyにて)

乗用として、ロバは家財道具の運搬、および女、子供の騎乗用として、また、移牧地での水の運搬用として重要である。家財道具としては臼 (*kurkol/kurki*)¹⁴⁾、棒杵 (*unugal/unude*)、鉄製の鍋 (*fayande/payane*) などの炊事道具、牛乳を入れるヒョウタン、あるいは木製の容器 (前者を *horde/kore*、後者は *la'al/le'e*)、敷きゴザ (*leeso kud'i/leese kud'i*) などが必需品である。その他、ニワトリは専用の編みカゴ (*suny-suny gertoode*/不明) に入れて運ばれるし、生れたばかりの仔ヒツジもロバの背にのせて運ばれる。停泊地では木の枝を組んでベッド (*mirde/mirde*) を作ることが多いが、最近では鉄製のベッドを荷馬車に積んで運ぶ人もある。

1日の移動距離は20 km から40 km のあいだである。井戸のある村、又は町ごとに停泊し、大きな木の下に木の枝を組んでベッドをしつらえたり、あるいは丈の高い枯草を簡単に編んで風除けをつくり夜を過すと翌朝はそこを発って次の停泊地に向う。ジョロフ地方のひとつの村 Mbousoobé から約200 km 南下した街、Kaolack に向った場合のひとつのルートを示すと次のとおりである。Mbousoobé→Weendu・Loumbel→Darma→Touba→Kaël→Touba M'boul→Gossas→Fas→Kaolack (図7, p. 698 を参照)。ここに示す地名はそこで停泊した場所であり、約200 km の距離を7泊し、8日目に到着している。移牧先の場所につくと村、あるいは町のはずれ1~2 km の範囲内に乾季をそこで過すキャンプを設営する。このキャンプは *wiitnde* とよばれており、普通、同じ村、あるいは近隣の村同志の人々がかたまて暮らして



写真5 ロバの背に家財道具をのせ、移動の途中の人々。この人々は乾季が本格的になった2月に入ってやっと移牧を開始した。(1980年2月4日撮影 Dahra の南約20 km の地点)

14) 以下、カッコ内にフルベ語での名称を単数形/複数形の順で示す。

いる。移牧の間も家畜に与える水は大きな問題であり、したがって井戸から遠く離れてキャンプを設けることはなく、村あるいは町の外ではあるが井戸から遠くない場所が選ばれる。

筆者は1980年2月上旬の時点においてジョロフ地方のフルベ族の村五つについて移牧に関する統計的な調査をおこなった。その結果をまとめたものが表4 (pp. 696-697) である。以下、この表にもとづいて説明を加えてゆくが、その前にこの表についての全体的な説明をしておく。

調査をおこなった五つの村はそれぞれ住民数200~300人のものであり、フルベ族の村としては中くらいの大きさである。ただし、本稿においては詳述しないが¹⁵⁾、周知のとおりフルベ族は奴隷¹⁶⁾、*maccube* とよばれる人々をもみずからの村に内包しており、村の住民数を表わす場合、奴隷の人々をもフルベ族としてかぞえている。奴隷の人々の所有する家畜数はフルベ族のそれにくらべてはるかに少なく、したがって移牧に出る人は大変少ない。彼らは少数のウシ、そしてヒツジ、ヤギを飼い、乾季の間も村にとどまって暮らしていることが多い。

この調査は家長、つまり既婚の男性を主な対象にしてなされている。「伴なった家族」というのは家長が移牧する際に家族の誰を同行したかということである。多くは妻と子供を同行している。女性はウシの搾乳、および牛乳の処理、販売にあたって不可欠の存在であり、子供も10才をすぎれば重要な働き手である。女性が単独で移牧にでているケースがいくつかあるが、これについては後に触れる。

「経済活動の内容」については説明が必要である。第Ⅳ章、農耕について記述した部分で農耕民ウォロフ族は家畜をもたず、したがってウシの糞による施肥をすることができないこと、そのため一定の耕地を長年にわたって再利用することができず頻繁に耕地を移動、あるいは拡大することを記した。それに対し、牧畜民フルベ族は収穫後の畑地にウシを集中的に放つことによってウシの糞による施肥をすることができるので耕地は移動しないでも長年の耕作が可能である。

15) [小川 1979b] を参照。

16) 奴隷という日本語から受ける感じには大変強いものがあるがニュアンスは少し異なるので注意を要する。*macculo*/(複) *maccube* とは第1代目の奴隷、つまり力づくでフルベ族に隷属させられた人々、あるいは他人から買いとられた人である。現実にはこのような人は今はいない。第2代目以降 (*maccube* 同志の間に生れた子供、あるいは *macculo* の女とフルベの男との間に生れた子供) は正確には *diimaajo/riimaybe* とよばれ、自分自身の耕作地ももっているし、家畜も所有し、フルベ族はこれらの人々を他人に売ったり、他人から買ったりはできない。フルベ族の家族の一員と同じような扱いをうける人々である。現在、フルベ族と生活を共にする奴隷は総て *riimaybe* の筈であるが、フルベ族も、また「奴隷」自身も自分達を *maccube* とよんでいる [cf. BALDE 1975: 183-220]。

ここで述べる経済活動とは端的にいえばフルベ族がウシという経済資本をどのように利用しているかということである。移牧をするフルベ族の多くは農耕民ウォロフ族が住む村、あるいは町に行く。そこで表4における+の記号は次のことを意味する。ウォロフ族は収穫のすんだトウジンビエ、あるいは落花生の畑に、フルベ族がつれてくる家畜を迎え入れ、そこに夜営させる。つまり、フルベ族の側では、ウォロフ族の畑において、収穫後、残されたトウジンビエや落花生の葉や茎を家畜飼料として活用できるし、他方、ウォロフ族の側では、その見かえりとして、フルベ族のウシが集中的にもたらす糞を自然施肥として利用できる仕組になっているのである。かくして、ウォロフ族は収穫後の刈り残しを提供するだけで、来季の耕作に必要な施肥を、いながらにしてできるわけで、フルベ族の到来はむしろ歓迎すべきことなのである。したがって、ウォロフ族はフルベ族の移牧期間中、村の井戸水をフルベ族が家畜に与えることになんらの異議を示さない。この次元ですでに家畜の飼料、水に対して耕地への施肥という形で農耕民と牧畜民の間での交換ないしは相補的な関係が成り立っている。彼らは更にもうひとつの交換をおこなう。人間の食糧の交換である。フルベ族は牛乳を与え、その代わりにウォロフ族からトウジンビエをもらうのである。この交換は厳密になされており1980年2月の時点で牛乳とトウジンビエは同量づつ（容器1杯の牛乳に対し、容器1杯のトウジンビエというように）交換されていた。このように+の記号はフルベ族とウォロフ族の間での相補的交換形態が完全に成立している場合を示している。

それに対し△の記号はフルベ族とウォロフ族の間で家畜の飼料 対 施肥という次元についてのみ交換がなされていることを示す。つまり農耕民は家畜の飼料、および水を与える。牧畜民はウシを農耕民の畑に集中することによって施肥をおこなう。この次元では両者ともに必要としていることについて相補的な交換形態は成立しているのである。しかし人間の食糧についてはもはや直接の交換はしない。フルベ族は牛乳を町の市場にもってゆき売るのである。そうして得た金でやはり市場でトウジンビエを買うという形である。

-の記号は今まで述べてきたような直接的交換は一切おこなわれないことを示している。フルベ族がウォロフ族の畑で施肥をすることもなく、したがってフルベ族は家畜の飼料と水は別のところで求めなくてはならない。また牛乳と農産物の交換も直接的な形ではおこなわれない。すべては売買という貨幣経済を通しておこなわれる。

最後に「sardiの有無」とは乾季の移牧中に家畜群の放牧管理のために牧童を雇っているか否かを示している。普通、フルベ族はウシやヒツジなどの家畜群を放牧管理す

る牧童について *gaynaako*/(複) *aynaabe* という。しかしながら彼らは移牧の間については他部族(トゥクルール族, セレール族, またはフルベ族の奴隷の人々)の若者を牧童として雇い, この牧童を *sardi* とよぶのである。+の記号はこのような牧童を雇っていることを示し, -の記号は牧童を雇わず自分達で家畜管理していることを示す。

ではここで表を示し, 以下それに基づき説明を加えよう。

この表4を全体的に見た場合, まず次の二つのことに気づく。

- ① 村によっては各個人がばらばらに別々の場所に移牧しているのに対し, 別の村では大部分の人がまとまって同じ場所, あるいは同じ地方に移牧している。
- ② 移牧の行き先は大別して三つに分類して考えることができる。(1) ジョロフ地方内部で移牧する人, (2) Kaolack を中心とした Sine-Saloum 地方の大都市に移牧する人, (3) Baol 地方の町村に移牧する人。

上記の各々について検討をしていこう。

この表に示した五つの村落のうち, *Nguely*¹⁷⁾ 及び *Deykwot* の人々は, *Nguely* については7人中5人が, *Deykwot* については8人中3人がジョロフ地方内部で短距離の移牧をしている。ジョロフ地方内部という点では同じであるがキャンプ地はそれぞれに異なっている。それに対し *Mboussoobé* の人々は1人の女性を除き総てが *Kaolack* に向っている。彼らは *Kaolack* では皆かたまって同じ場所にキャンプを作っている。また *Mbar*, 及び *Nelbi* の人々はキャンプ地そのものには違いがあるが, それでも皆 *Baol* 地方に移牧しているという点で一致している。

さて, *Nguely*, *Deykwot* の2村についてみると, これら2村ともに1930年以降設置された深さ30m以上の深井戸をもってはいるが, ディーゼル・エンジンによる揚水ポンプはもっていない。深井戸での水汲みは, 特に家畜をたくさんもっている人々にとっては大変重労働である。この二つの村の人々がジョロフ地方内で移牧した場所, *Lindé*, *Sangué*, *Tiel*, *Gassane* には総てディーゼル・エンジンによる揚水ポンプ, 及び家畜の水飲み場がある。*Lool-Lool* にだけは深井戸しかない。こういった場所にキャンプする人々になぜこの場所を移牧地として選んだかを尋ねると, 多くの人々は, まず井戸の水汲みの苦痛から解放されるためだという。彼らにとっては家畜の水飲み場があるということがそこに移牧する第一の理由になっているのである。同じジョロフ地方内部であるから移牧した先の場所にもフルベ族が多くすむ。*Lindé*, 及び

17) 以下, 地名表記についてはセネガルで行政的に採用している表記法に従う。*Nguely* と表記されているのは実際には [*geeli*] と発音される。*Mboussoobé* は [*busoobe*] と発音される。

表4 五つの村についての移牧の形態

村名 個人, 年齢	移牧地	地方	伴なった家族	経済活動 の内容	sardi の有無	備考
Nguely						
A, 34	Siilat	Jolof	妻1	-	-	Siilat は Tiel から 4 km の場所 sardi の給料 10,000フラン CFA/月
B, 38	Lindé	Jolof	妻1, 子供3	+	+	
C, 50	Sangué	Jolof	妻1, 子供4	-	-	
D, 30	Mbar	Sine-Saloum	3人の妻のうち第 2妻, 子供2	+	-	
E, 40	Sangué	Jolof	妻1, 子供2	-	-	
F, 42	Guinguinéo	Sine-Saloum	母, 妻2, 子供2	-	-	
G, 47	Tiel	Jolof	妻1	-	-	
Mboussoobé						
A, 70	Kaolack	Sine-Saloum	妻1	-	+	弟の息子がその妻2人と村に残っているため curaadi 34頭を残す。
B, 48	Kaolack	Sine-Saloum		-	+	Bの妻である。夫とは別に1人で、ウシ1頭を伴ない移牧。
C, ?	Touba	Baol		-	-	
D, 48	Kaolack	Sine-Saloum	妻1, 弟2, 妹1	-	+	既婚の女性。夫は村に残る。Gは自分のウシ2頭を 伴ない移牧。
E, 35	Kaolack	Sine-Saloum	2人の妻のうち第 2妻, 子供1	-	+	
F, 30	Kaolack	Sine-Saloum	妻1	-	+	
G, 20	Kaolack	Sine-Saloum		-	+	
H, 45	Kaolack	Sine-Saloum	妻1, 子供3, 長 男の妻1	-	+	
I, 55	Kaolack	Sine-Saloum	妻1, 子供1	-	+	
J, 18	Kaolack	Sine-Saloum		-	+	
K, 57	Kaolack	Sine-Saloum	妻1, 子供2	-	+	未婚男子。両親, 兄は村に残る。Jは自分のウシ2 頭を伴ない移牧。
L, 60	Kaolack	Sine-Saloum		-	+	母が村に残っているが, curaadi 残さず。 女性。夫は死亡。自分のウシ1頭を伴ない移牧。

Deykwot						
A, 62	Ndulo	Baol	妻 2, 子供 5	△	—	} Kolobane, Athiou とも Kaolack に近い ウォロフ族の村 母が村に残っているが <i>curaadi</i> 残さず。
B, 62	Sangué	Jolof	妻 1, 子供 3	—	—	
C, 60	Gassane	Jolof	妻 1, 子供 5	+	—	
D, 45	Lool-Lool	Jolof	妻 2, 子供 2	—	—	
E, 53	Kolobane	Sine-Saloum	妻 1, 子供 3	+	—	
F, 66	Athiou	Sine-Saloum	妻 3, 子供 2	+	+	
G, 50	Mbacké	Baol	妻 1, 子供 5	+	—	
H, 50	Mbacké	Baol	妻 1, 子供 4	+	—	
Mbar						
A, 68	Missira	Baol	妻 1, 子供 2	+	—	
B, 41	Missira	Baol	妻 1, 子供 4	+	—	
C, 50	Thiamène	Baol	妻 1, 子供 6	△	—	
D, 48	Kawsara	Baol	妻 1, 子供 7	+	—	
E, 40	Missira	Baol	母, 妻 1, 子供 2	+	—	
Nelbi						
A, 68	Mbiraan	Baol	妻 2, 子供 9	+	—	父は死亡。
B, 60	Mbiraan	Baol	妻 1, 子供 5	+	—	
C, 50	Missira	Baol	妻 2, 子供 3	+	—	
D, 42	Missira	Baol	妻 1, 子供 4	+	—	
E, 28	Missira	Baol	妻 1, 子供 1	+	—	
F, 50	Mbiraan	Baol	妻 3, 子供 5	+	—	
G, 20	Missira	Baol	母, 妻 1, 子供 2	+	—	
H, 57	Saambé	Baol	妻 2, 子供 6	+	—	

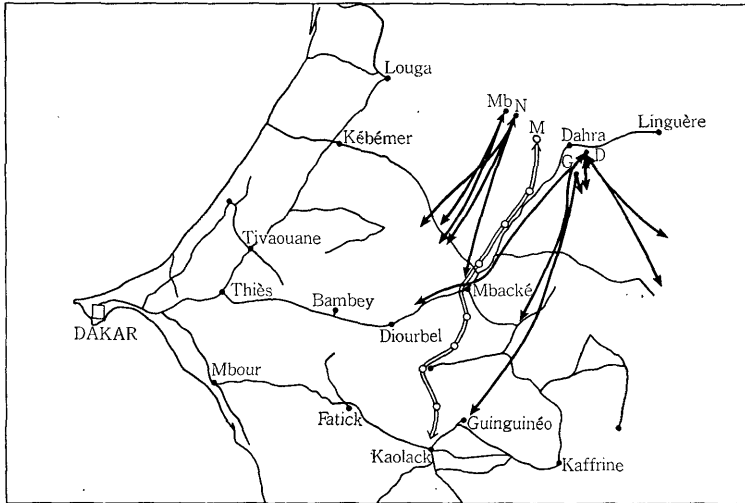


図7 主要都市、および道路と移牧の経路

G: Nguely, D: Deykwot, M: Mbousoobé, N: Nelbi, Mb: Mbar を示す。
Mからの $\text{---}\bigcirc\text{---}$ は Mbousoobé から Kaolack への移動の経路と停泊地を示す。

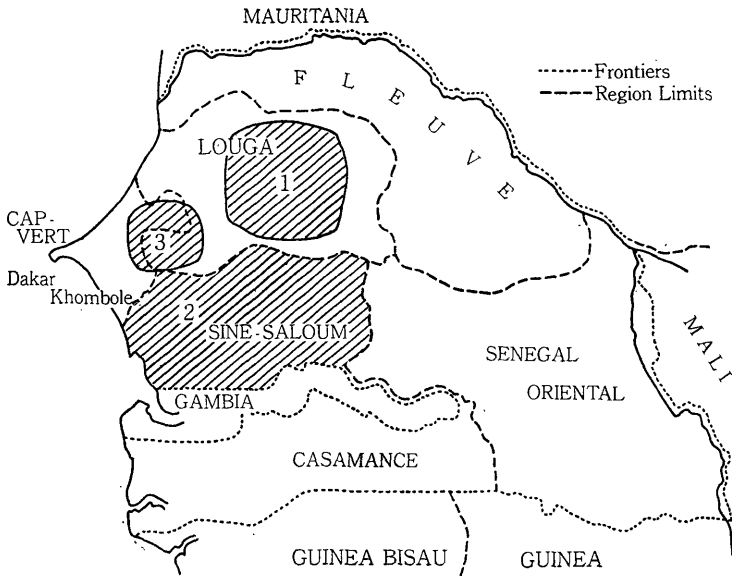


図8 セネガル全土とジェンゲルベ・グループの移牧地

1. がジョロフ (Jolof) 地方
 2. はシン・サルム (Sine-Saloum) 地方
 3. はバオル (Baol) 地方
- 〔概略〕
- 注 1., 3. はかつてあった王国の呼称にもとづく名称で、現在の行政区割による区域とは異なる。

Gassane にはウォロフ族も多く住んでいるが、その他の村ではほとんどフルベ族のみである。この事実と「経済活動の内容」とは対応を示している。つまり、同じフルベ族が住んでいる村の近くにキャンプしている人々にとっては村の住人自体が自分達と同じ牧畜民なのであるから一切の交換形態は成り立たない。ウォロフ族も多く住む Lindé, Gassane を除いて総て一である。農産物、茶、砂糖などの必需食品についてはウシを売って得た金で買うしかない。彼らは時々、Linguère, Dahra などの町まで出てウシを売り、必需品を買う。ウシの値段は性別、年齢によって、また仲介人との交渉の仕方次第で変るが、オス2オウシで20,000フラン CFA 前後、メス成ウシで40,000~50,000フラン CFA、十分ふとった去勢ウシは80,000フラン CFA をこえる。穀物の値段は市場価格でトウジンビエ 100 kg の1袋が4,500フラン CFA、米は1袋(100 kg) 9,000フラン CFA である。また嗜好品ではあるが日常の生活に欠かせない茶は 100 g で250フラン CFA、砂糖は 1 kg が450フラン CFA である(1980年2月の時点)。トウジンビエは妻1人が毎日3~4 kg を料理し、茶 100 g、砂糖 1 kg は家族が2~3日で消費してしまう¹⁸⁾。

さて Nguely, Deykwot の2村について *sardi* を雇っているのは Nguely の B だけである。彼は自分のウシ、ヒツジ、ヤギのほか、父のウシも一緒に移牧に出しており、ウシは全部で約120頭をつれている。村で乾季を過ごす父のもとには牝ウシ4頭だけを残した。彼は移牧先のキャンプではモーリタニア人の *sardi* を雇っており、*sardi* には月10,000フラン CFA の給料を払っている。給料の他、*sardi* の食事、茶代は総て B の負担である。かつては *sardi* を雇った場合、食事、茶は雇用主の負担であることは現在と変わらないが給料は一切支払われなかった。その代り、乾季が終り雇用契約が終りになった時点でメスの2オウシを1頭与えるという形が多かったが、現在このような報酬方法はすたれたようで総ては月給払いになっている。

次に, Mboussoobé の人々についてみてみよう。この村の人々は1人の女性を除いてすべて Kaolack に移牧している。Kaolack は人口5万人を越える大きな都市である。Sine-Saloum 地方はセネガルの中でもっとも多く落花生を産し、その中心都市 Kaolack は落花生の集荷地として重要な役割を果たしている。そのほか入江になった海岸部では塩田による製塩もおこなわれている。住民はそのほとんどがウォロフ族である。Kaolack に移牧した Mboussoobé の人々について「経済活動の内容」の項をみると総て一である。つまり、フルベ族はウォロフ族の畑にウシの糞による施肥

18) 茶、砂糖の摂取量は牧畜民の生活が激しい肉体疲労を伴うものであることを考慮しても過大であると思われる。朝、昼、夜と茶をつくる上、客があるたびに茶をつくる。砂糖の過剰摂取は健康上も良いとは思えないし、茶、砂糖代が家計に占める割合は大変大きい。

をすることもなく、また牛乳と農産物の直接的交換も一切なされていない。フルベ族は **Kaolack** の街の外の荒れた野原で家畜の飼料を得、水に関しては浅井戸を掘る。ジョロフ地方からずっと南下したこの地方はサヘル気候帯からスーダン気候帯にはいっており、したがって乾季の間も枯草ではあるが牧草は多く、また *Acacia albida* などマメ科アカシア属の植物で乾季に豊富な実をつける植物が多く、それらの実を莢ごと与えて飼料としている。また浅井戸も乾季の全期間を通して水が得られる。

「*sardi* の有無」についてみると **Mboussoobé** から **Kaolack** に行った人は総ての人が *sardi* を雇っている。しかし、これは各個人が1人の *sardi* を雇っているのではない。**Mboussoobé** からの人が皆で金を出しあって1人の *sardi* を雇っているのである。この場合、*sardi* としてはトゥクルール族の男を雇っているが、フルベ族の各家長はウシ1頭につき毎月100フラン CFA を *sardi* に払う。*sardi* は **Mboussoobé** から来た人総てのウシをひとつの群にまとめて管理しているのである。このようにジョロフ地方から遠く離れた **Kaolack** に移牧する場合、同じ村からの人々はまとまってキャンプを形成し、しかも *sardi* も皆で1人を雇うというような形をとっており、共同体意識が表面に出ているとあってよいだろう。*sardi* を雇うことによってフルベ族自身は放牧管理の労働から解放される。彼らは午前中、浅井戸での水汲みに従事し、家畜を *sardi* に手渡した後、午後は **Kaolack** の街に出て牛乳の販売にあたる。木の容器 (*la'al/le'e*) に酸乳 (*kosam kaadam*) を入れ、ウォロフ族の家々を回って売るか、あるいは市場にて売る。小さなヒョウタンを縦に二つ割にした杓子 (*korel/horoñ*) (約 1/10 l 入り) 1杯で25フラン CFA が普通価格である。牛乳販売の収入だけでは生計がなり立たないので、多くの方は乾季の間にウシを売る。

さて **Mboussoobé** の C, G, L はともに女性である。C は B の妻である。B 自身は **Kaolack** に移牧しているのに C はたった1頭のウシをつれて **Touba** に移牧している。

G についてみると夫は家畜の大半とともに **Mboussoobé** に残っているが、G だけが自分自身に属するウシ2頭を伴って移牧に出た。

L は60才と高齢である。夫はすでに死亡している。息子夫婦は移牧に出ず村に残っている。L は自分のウシただ1頭をつれて **Kaolack** に来ているのである。このように女性が単独で少数のウシをつれて移牧する場合、牛乳を売って現金を得られるところというのが最低の条件であり、したがって **Kaolack** のような都市に向うことになる。また、彼女らは販売用の牛乳量を少しでも増やすため安い粉乳を買い、おおめの水でといて生乳にまぜ、つまり水増しした後、酸乳にして売るという。更にこうして

女性が単独で移牧に出る場合、翌年の雨季に村に帰る時は何らかの現金をもって帰ることが期待されている。その期待にそえるようにするため彼女らは移牧地で売春をすることがあるということも聞いた。

Mbar, および Nelbi の 2 村の人々は総て Baol 地方の村々に移牧している。この表に示された Missira, Thiamène, Kawsara, Mbiraan, Saambé といった村々は総てウォロフ族を中心とした人口 1,000 人以下のものである。これらの村々に移牧した人々は Mbar の C を除いて総ての人がウォロフ族と完全な交換形態を成立させている。また, *sardi* を雇っている人は一人もおらず, 総て自分達自身で家畜管理している。

以上, 表 4 について述べてきた¹⁹⁾ ことから結論として次のことがいえる。

- ① ジョロフ地方のフルベ族が乾季の移牧に向う場所は大別すると三つの地域にわけられる。(a) ジョロフ地方内部のフルベ族, あるいはウォロフ族の住む村周辺, (b) Kaolack を中心とした Sine-Saloum 地方の大都市周辺, (c) Baol 地方のウォロフ族が多く住む村々 (図 8 参照)。
- ② 移牧にむかう場所と, そこでなされる経済活動の間には密接な関連がある。

上記②についてより詳しく記すと次のことがいえよう。

ジョロフ地方内部で移牧をおこなう人々は同地方内部にはフルベ族の村が多いことから, 農耕民ウォロフ族と何らかの形で交換をすることはもともと求めてはおらず「自給自足」の生活をしている。移牧はしたがって農耕民との間に相補的な関係を結ぶためというような性格は全くなく, 牛乳は自分達で消費し, 穀物, 茶, 砂糖などの需要についてはウシを売ることによって解決している。

自分達の村から 200 km も南下した Kaolack のような大都会に移牧する人々は皆で結束する傾向がある。しかしながら牛乳の販売については各個人ばらばらに市場などで売り, 現金収入を得ている。Kaolack は都会であることからしてウォロフ族との間に牧畜民と農耕民との間での相補的交換形態は全く成立していない。すべては貨幣経済という大きな枠の中での循環である。ジョロフ地方内部で移牧する人々はまず

19) 1980年の2月の時点において, 表4に示した人々の他に, Nguely についてはもう一人, Mbousoobé についてはさらにあと二人の人々が移牧に出ているが, この人々は他の人々とは少しく異なった移牧の形をとっている。詳しい説明が必要と思われるので, 本稿の考察からは除外し, 別稿にて事例報告として発表するつもりである。

近代的な家畜の水飲み設備を求めているのに対し、Kaolack という都会にきた人々は逆に浅井戸を掘って家畜のための水を得ている。

Baol 地方に行く人々は現金を求めるとの移牧ではなく農耕民との関係を密にするための移牧といえる。彼らはウォロフ族の畑を通して家畜の飼料を得、見かえりにその畑に施肥をし、更に牛乳とトウジンビエの交換をおこなっている。このように農耕民との直接の交換経済を成立させている人々はその関係を長年にわたって維持しており、毎年同じウォロフ族の村に移牧し、その関係はしばしば父子代々におよぶものになっている。逆にジョロフ地方内部での移牧をおこなう人々はその年の牧草(枯草)の量の多寡によってかなり自由に移牧場所を変えている。ウォロフ族との交換経済ではあるが直接の交換ではなく貨幣経済というより大きな枠の中で交換を成立させようという人々は Kaolack などの大都市に移牧している。

VI. 考 察——結論にかえて——

本稿ではセネガルの半乾燥地域、サヘルにおいて季節的移牧をする牧畜民フルベ族、ジェンゲルベ・グループの人々についてその自然環境について記し、彼らがおこなう農耕と牧畜の形態について記してきた。

ここでもういちど Ruddle 論文 [RUDDE 1979] にもどり、Ruddle が指摘した乾燥地域における牧畜民をとりまく問題点を再検討し、本稿で記したジェンゲルベ・グループについて考察を加えたい。

Ruddle が指摘した主な問題点は次の通りである。

まず、Ruddle は乾燥、あるいは半乾燥地域における環境悪化の基本的な要因は世界の人口が急増していることにあるとし、更に、経済発展の結果として現金経済があらゆる地域に導入されていることで状況は一層牧畜民に不利になっていることを述べる。このような基本的状況の中で世界の多くの地域で砂漠化、desertification が急速に進行していることによって問題は一層悪化している。そして、この砂漠化は気候条件によるというよりも人間が自然の再生可能な資源を誤って使用していることに帰因しているとする。その主要な例は次の通りである。

- ① 灌漑農耕を本来それが不適当な地域でおこなおうとしていること。
- ② 不適当な灌漑技術を用いていること；および灌漑耕地の管理の誤り。
- ③ 降雨に依存する農耕を本来それが不適当な土地でおこなっていること。
- ④ overgrazing (それに加えるに早魃)，および、それにもとづく牧草地の劣悪化。

- ⑤ 燃料用として木を伐ること。
- ⑥ 野生獣、特に草食獣が減少していること [RUDDLE 1979: 823]。

上記の問題について Ruddle は詳述し、さらに具体的な解決策を示唆しているのであるが、ジェンゲルベ・グループについていえば、③、④、⑤、⑥、特に③、④が重要な問題になっていると思われる。以下、ジョロフ地方への農耕民の進出の問題、および、overgrazing について考えてみたい。

1. ジョロフ地方への農耕民の進出

ジョロフ地方は第Ⅱ章で記した通りサヘル型気候帯に位置し、年間の降雨量は多い年で 500~600 mm 前後、少ない年には 300 mm 前後しかなく、時間的にも空間的にも大変不安定である。土質の面からも砂の多い土地であり、決して農耕に適した土地であるとはいえない。土質、降雨量という二つの点からして本来農耕には不適當と思われるこの地方に特に今世紀初頭以降、農耕民ウォロフ族が多く進出してきたのはどのような理由にもとづくのであろうか。

まず一般的に言えることとして牧畜民よりも農耕民の方が人口増加率が高いという点を指摘しておかねばなるまい。

Ruddle もわずかに指摘している [RUDDLE 1979: 834] が、Swift はアフリカのサヘル地域における人口調査が難しいことを強調しながらも、牧畜民における人口増加率は農耕民社会におけるそれよりも一般に半分以上も低いことを統計にもとづき述べている。ちなみにいくつかの例をみてるに、ニジェール共和国において遊牧形態を維持しているフルベ族の一グループ、Bororo では人口の自然増加率は11%、半農半牧の Farfaru では23%であり、遊牧をするトゥアレグ族では11%、それに対し、かつてトゥアレグ族の奴隷であり、現在は定着農耕をしているブズ族では35%と3倍以上の数値を示している [SWIFT 1977: 465]。

セネガルについてみると、主に農耕を中心とする人々が住む地域での人口自然増加率が23%であるのに対し、牧畜をするモール族の増加率は11%である。また、カメルーンについてみると国全体での人口増加率が19%であるのに対し、アダマワ地区に住む牧畜民フルベ族のそれは7%にすぎない。マリ国についてだけは農耕民が多く住む地域での人口増加率13%に対し、牧畜民フルベ族のそれが16%と逆の傾向を示している [SWIFT 1977: 466]。

Swift は更に、ニジェール国について牧畜民社会（フルベ族、トゥアレグ族）においては子供を1人も生まないまま出産可能期を終える女性の数が農耕民社会における

それよりも多いことを記し、また、アフリカでは一般に女性の数が男性の数を上回るのに対し遊牧民社会では逆であることも示している [SWIFT 1977: 467]。

これまでの伝統的な見方からすれば牧畜民は農耕民よりも健康であったといえる。農耕民に比べた場合、牧畜民は3倍から4倍も多くのタンパク質を摂取していたようであるし、また、広い地域に分散して住んでいるという人口密度の低さから、伝染病が蔓延する危険度も少なかったからである [RUDDLE 1979: 833-834]。

ところが現在、世界の経済発展が強力に推進されている中でマージナルな領域で生業を営む牧畜民は中央行政府からの諸施策からもとり残される傾向があり、食糧事情の劣悪化、水の不足による衛生設備の悪さ、それにもとづく病気の蔓延、予防衛生施設の不足などにより健康状態は大変悪くなっている。セネガルで特に眼につく病気は住血吸虫症、トラコーマ、梅毒などである。特に梅毒について、その症状はフルベ語では *siti* とよばれており、[BA 1977: 117], Retel-Laurentin の報告によるとフルベ族の40%の人々が梅毒にかかっているという [RETEL-LAURENTIN 1974: 58]²⁰⁾。

次にセネガルについて特殊的にいえることとしてイスラム教の一分派としてセネガルで生れ、短期間のうちに驚異的な発展拡大をとげたムーリッド、Mouride²¹⁾ 派の躍進をあげなければならない。

一般に黒アフリカのイスラム教にみられる特質として、導師、marabout²²⁾ 個人への帰依、ないしは全的奉仕という傾向が強くみられるといわれる。このことを Monteil は「マラブー現象」、*phénomène maraboutique* といひ [MONTEIL 1966b: 159], Sy は「死者が死体洗浄者の手に完全に身を任すように」弟子も導師に精神的にも肉体的にも完全に一体化する、という表現をしている [Sy 1969: 135]。ムーリッド派にはこの傾向が特に顕著にみられ、その創始者アーマド・バンバ、Amadou Bamba (1850-1927)、およびそれ以後、Bamba 家の血筋の者になる導師への絶対服従と奉仕の精神が強くあらわれている。

ムーリッドという言葉自体はアラビア語の *murīd*、つまり、「志願者、修練者」を意

20) カメルーンのフルベ族について Retel-Laurentin は75%の人々が梅毒にかかっていることを記している [RETEL-LAURENTIN 1974: 57]。

21) 以下、ムーリッド派に関する記述に際する筆記法についてはフランス語の文献にみられる筆記法に準ずる。

22) Marabout という言葉はイスラム教の導師を表わすものとしてセネガルでも広く使われているのみならずフランス語にもとり入れられている。もともとは北アフリカのアラビア語方言で *al-Murābit*、つまり Almoravide を表わす語の一般的な言い方、*mrābot* がなまったものといわれる [MONTEIL 1966b: 160]。ウォロフ語では *sariñ* といわれるのが普通であり、フルベ族は一般に *ceerno* といっている。

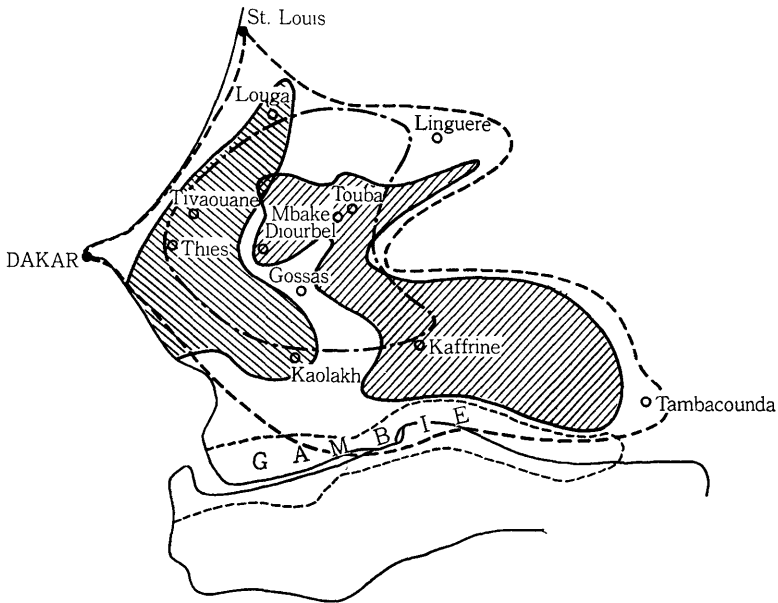
味する言葉から来ているといわれる [MONTEIL 1966b: 178]。

1850年頃生れたとされる Amadou Bamba は19世紀末、イスラム教の導師として、当時のフランス植民地行政府の政策に対して宗教とナショナリズムをからみあわせたような教えを説き多くの民衆の支持を得るようになった。植民地行政府は Amadou Bamba の存在を危険なもののみなし彼をガボン国に強制的に移した(1895年から1902年まで)が、この流刑は後にセネガル民衆の中でイスラム教の創始者マホメットの遷都にたとえられるようになる。セネガルに帰国を許可されて後もしばらくは不遇な処置を受けているが、1912年にジョロフ地方とバオル、Baol 地方の境界に近い Diourbel に居を定め、「現世での救済は労働にあり」ということを表面に出して以来、植民地行政府の意向と合致し、その後飛躍的な発展をとげるにいたった。

Sy の記述にしたがって述べると、Bamba は現世の利益を完全に放棄し、真の幸福は存在を忘れることにあると述べ、「忍耐強く空腹に耐え、着るものは華美にならないよう」と説くが、同時に、このような自己放棄は一般の人々には困難であることを認め、そこから転じて労働が救いとなることを説く。人間は瞑想だけでは生きることができないことを認め、そこから労働が祈りの一部であると説いたのである [Sy 1969: 138]。Sy はこの辺の状況を「Bamba は瞑想的禁欲主義の伝統を受け継ぎながら、その教えを当時の民衆の物質的欲望にうまく結びつけたのである」[Sy 1969: 140-141] と表現している。

Bamba はこうして労働を称賛した上で具体的には *daara* とよばれる農業共同体をいくつも設置し、新しい土地を開墾させ、その共同体員からは一人、一年に140フラン CFA の施しをムーリッド派本部におさめさせると同時に、一週間に一日(水曜日)はムーリッド派のための耕作地を耕すように指導した。ムーリッドに帰依した人々にとっては現世での労働が来世での救済につながるものである。もともとムーリッド派は農耕民ウォロフ族の間に生れ、発展したのであるが、上記のような具体的な教義が示されて以来、Baol 地方、Sine-Saloum 地方、そしてジョロフ地方へと飛躍的な開墾がなされたのである。そして、1913年以降ムーリッド派が落花生栽培のために耕地を広げたことは当時、セネガルを一次資源(落花生)供給圏として開発しようとしていたフランス植民地行政府の意向と合致していたのである [cf. Sy 1969: 152-153]。

ムーリッド派の発展に伴ない耕地がどのように拡大したか、Monteil が示した図を転用しておく(図9)。こうして牧畜を主とするフルベ族は追われ、ジョロフ地方の更に東、半砂漠の Ferlo に追いこまれていったのである。Sy はムーリッド派のウォ



- 1913年におけるムーリッド派の分布
- 1952年におけるムーリッド派の分布
- ▨ 1952年、ムーリッド派の耕作地
- ▨ 1925年に落花生が生産されていた地域

図9 ムーリッド派の耕地拡大を示す図
[MONTEIL 1966b: 198] の図を転用

ロフ族に追われたフルベ族が武器をもって抵抗し、多くの死者を出した例を記している [Sy 1969: 155-163]。ムーリッド派の農耕民はまた、耕作地の休閑ということを知らず、それが耕地の拡大に一層の拍車をかけたともいわれる [Sy 1969: 164]。

2. overgrazing と牧草地の劣悪化

第II章, 3において、ジョロフ地方のフルベ族にあっては個人が所有する家畜数はかつてに比して増えていることを記したが、overgrazing をおこしているか、over-

grazing が生じているとすればどの程度緊急な問題になっているかについて筆者は正確な資料をもっていない。ただ、1948年以降、時のフランス植民地行政府の牧畜民定着化政策の一環としてジョロフ地方の各地の村に設置された動力ポンプ付きの水飲み施設が30年を経過した現在、逆に牧草の劣悪化をひきおこしていることを記しておこう。

本稿では詳説しなかったが深井戸でツルベを用いて水を汲み、数多くの家畜に水を飲ませるのは多大の肉体疲労を伴う重労働である。1948年以來、ジョロフ地方の各地に動力ポンプ付きの水飲み場が設置されたことでその周辺に住む牧畜民の労働はかなり軽減されたことは確かである。そのことは雨季あけから乾季にかけて家畜に与える水が緊急の問題となる頃、水飲み場から 15~20 km ぐらいの範囲に住んでいるフルベ族の人々は距離を厭わず家畜を水飲み場にむかわせることにははっきり読みとれる。揚水のためのボーリングは大変深くなされており、浅いもので 200 m、深いものは 300 m を超えている。

水飲み場のポンプはディーゼル・エンジン用の重油が確実に供給されさえすれば家畜への水という問題は解決する。水を求めて多くの家畜が水飲み場に集中する。そこに集められる家畜はウシだけでも毎日数千頭という単位である。その家畜が集中的に水飲み場近辺の牧草を食べる。そのため水飲み場から半径 10~15 km の範囲について overgrazing による牧草の劣悪化が起っているという。そのため家畜に水飲み場で水を飲ませた後、今度は逆にそこから遠く離れた場所につれてゆき草を食べさせねばならないという不合理な状況がおこっているのである [cf. SWIFT 1977: 474; RUDDLE 1979: 831]。

本稿ではフルベ族、ジェンゲルベ・グループについて伝統的な生業である牧畜と彼ら自身がおこなう農耕、および農耕民ウォロフ族との関係を考慮しながらいくつかの問題点を考察してきた。牧畜民の研究にあたっては牧畜という生業から生ずる諸特性だけに着目するのではなく、農耕（民）との関連について考察することも大切であることはすでに指摘されている [GULLIVER 1952, 1954; 丹野 1980]。牧畜民といえども乳製品だけで生きているわけでは決してない。彼らの食生活には穀物もかなりの部分を占めている。ジェンゲルベ・グループの人々が自分達の生業の一部として雨季の耕作をとり入れたのは「牧畜民としての墮落」などというのではなく、わずかな降雨を活用し、自分達で解決しうる範囲で生計維持機構を拡大するという意味で積極的に評価されてしかるべきものである。自給自足しえない部分について、かつては

フルベ族と農耕民ウォロフ族との間に相補的な交換形態が確立していたはずである。その交換形態は次第に崩れつつある。ジェンゲルベ・グループの乾季の間の移牧について検討した結果わかったように、ある人々は今なおウォロフ族との交換形態を維持しているが、他の人々は農耕民との直接的交換よりもより大きな市場経済にくみこまれることを志向している。しかしながら牧畜民の家畜が売り渡される時、その価格は市場で販売される食肉価格に対して11%にしかならないという報告もされており[RUDDLE 1979: 837]、牧畜民にとって有利ではない。

ジョロフ地方では次第に農耕民が増えつつあることを記したが、このことは耕地の拡大に伴う牧草地の減少だけを意味するものではない。貨幣経済の一般化に伴ない農耕民は耕作のおこなえない乾季の間も現金収入を得るため枯草を大量に刈り込み、町部で家畜を飼うフルベ族に売るといふ現象もおきている。ウォロフ族はロバ、またはウマに荷車をひかせ枯草の多い場所に向い刈り取る。それを Dahra, Linguère などの町で売るのである。荷車一杯で1,500フラン CFA から3,500フラン CFA という高値で売られている。放牧をしている目の前で枯草を刈り込まれても土地の帰属が明確にされていない以上、牧畜民としては阻止しようがないのだという。逆に、雨季、農耕民の畑にフルベ族の家畜がはいりこみ耕作物を荒らしたりすれば高額の賠償金を払わねばならない。

牧畜民保護の具体的な政策がだされない限りフルベ族はますます気候条件の劣悪な地域に追い込まれるか、生業形態を大きく変えざるを得ない状況に立ちいたることになる。

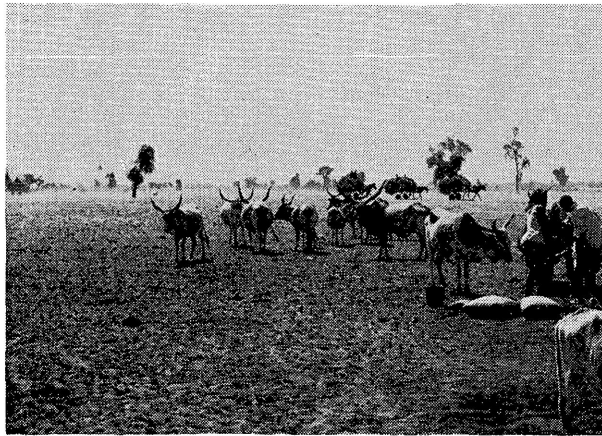


写真6 フルベ族の井戸のすぐそばを、枯草を刈り込んだウォロフ族の荷馬車が通る。(1980年2月17日撮影 Deykwotにて)

謝 辞

本稿のもととなった調査は国際交流基金、1979年度の資金援助により可能となった。この資金援助は1979年8月20日から1980年8月19日までの1年間に対して与えられた。残念ながら1980年3月、フィールドにて、セネガルでは治療不可能な病を得、パリにて手術を受けた後、調査途中でありながら帰国のやむなきに至った。国際交流基金には、まずその資金援助に対して心よりの御礼を申しあげたい。

また、病気の際には特に人物交流部、派遣課の皆様、および国際交流基金パリ駐在事務所所長には多大の御心配と御世話を賜った。さらに、在ダカール日本大使館館員の皆様には私の病気に際して言葉に言い表わせないほどの御配慮と御親切を賜った。本来ならば御名前を記して御礼申しあげるべきところであろうが、御心配下さった皆様に心よりの御礼を申し上げる。

本稿の成立については Dr. Kenneth Ruddle の論文に負うところが多い。また、全体的な構成については丹野正氏の論文にも多くの示唆を得ている。

本館の竹村卓二教授、垂水稔助教授、および福井勝義助教授には草稿の段階で御一読いただき、適切な御指摘、御助言を賜り、それらを生かすことができた。福井勝義助教授はアフリカ出発直前のお忙しい時間をさいて下さった。

やはり本館の小山修三助教授、端信行助教授は図表の作成にあたって多くの御教示をして下さった。また、吉田集而助手は植生に関する記述に際して適切な御教示を下された。植物の同定についてはセネガル、ダカール在、黒アフリカ基礎研究所 (IFAN) の Département de Botanique の皆様に御協力を得ている。

原稿の印刷にかかわるこまかな事務については宇坪直子さんのお世話をいただいた。

最後になったが、本館の梅棹忠夫館長、及び、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の富川盛道教授には私の病気に際して大変御心配をいただいたのみならず、常に暖かい激励を賜った。紙面をかりて御礼申し上げたい。

記して深く感謝申し上げます。

文 献

- ADAMS, J. A. et F. BRIGAUD, Cl. CHARREAU, R. FAUCK
1965 *Connaissance du Sénégal*, Fasc. 3, Saint-Louis, Senegal: CRDS.
- BA, Oumar
1977 Les Peuls du Djolof (Sénégal). In Oumar Ba, *Le Fouta Toro au Carrefour des Cultures*, Paris: L'Harmattan, pp. 114-117.
- BALDE, Mamadou Saliou
1975 L'esclavage et la guerre sainte au Fuuta-Jalon. In *L'Esclavage en Afrique Précoloniale*, Présenté par Claude Meillassoux, Paris: Maspéro, pp. 183-220.
- BERNUS, Edmond
1979 Le contrôle du milieu naturel et du troupeau par les éleveurs Touaregs Sahéliens. In *Pastoral Production and Society*, Cambridge Univ. Press, pp. 67-74.
- BONNET-DUPEYRON, M. F.
1951 Carte des Bovins. In *Cartes de l'Élevage pour le Sénégal et la Mauritanie*, ORSTOM.
- BONTE, Pierre
1975 Pasteurs et nomades—L'Exemple de la Mauritanie. In *Sécheresse et Famines du Sahel*

- II, Paris: Maspéro, pp. 62–86.
- DYSON-HUDSON, Neville
 1966 *Karimojong Politics*. Oxford: Clarendon Press.
- 野澤 謙, 谷 泰, 佐藤 俊, 山田信夫, 後藤 晃, 福井勝義
 1980 「牧畜社会研究の諸問題」『季刊人類学』11(2): 3–94.
- GOLDSCHMIDT, Walter
 1979 A General Model for Pastoral Social Systems. In *Pastoral Production and Society*, Cambridge Univ. Press, pp. 15–27.
- GRENIER, Philippe
 1957 *Rapport de Mission dans la Région du Ferlo*, Décembre 1956–Mai 1957. Service de l'Hydraulique de l'Afrique Occidentale Française.
- GROSMAIRE
 1957 *Éléments de Politique Sylvéo-Pastorale du Sahel Sénégalais*. Fascicule 10.
- GULLIVER, P. H.
 1952 The Karamajong Cluster. *Africa* 22(1): 1–22.
 1954 Jie Agriculture. *Uganda Journal* 18(1): 65–70.
 1955 *The Family Herds*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- IMANISHI, Kinji
 1954 Nomadism, an Ecological Interpretation. Silver Jubilee Vol. *Zinbun-Kagaku-Kenkyusho*, Kyoto: Kyoto Univ., pp. 466–479.
- KAWADA, Junzo
 1975 *Technologie Voltaïque—Rapport de Mission 1973–1975*. Ouagadougou, Haute-Volta: Musée National.
- MONOD, Théodore
 1975 Introduction. In Théodore Monod (ed.), *Les Sociétés Pastorales en Afrique Tropicale*, Oxford Univ. Press, pp. 3–98.
- MONTEIL, Vincent
 1966a Le Dyolof et Al-Bouri Ndiaye. In *Esquisses Sénégalaises*, pp. 115–158.
 1966b Une Confrérie Musulmane: Les Mourides du Sénégal. In *Esquisses Sénégalaises*, pp. 159–202.
- 中村和郎
 1980 「アフリカ大陸の気候——特にサヘルの砂漠化と関連して」『アフリカ研究』19: 82–96.
- 小川 了
 1979a 「西アフリカ収集調査行から」『国立民族学博物館研究報告』4(2): 358–370。
 1979b 「ラオベ・フルベ・ワンバーベ」『民博通信』5: 54–61。
 1980 「牧畜民フルベの生活と水」『季刊民族学』14: 48–59.
- POUPON, Henri
 1976 Influence de la sécheresse de l'Année 1972–1973 sur la végétation d'une savane sahélienne du Ferlo septentrional, Sénégal. In *La Désertification au Sud du Sahara*, Colloque de Nouakchotte, 17–19 Décembre 1973, Dakar: NEA, pp. 96–101.
- RETEL-LAURENTIN, Anne
 1974 *Infécondité en Afrique Noire—Maladies et Conséquences Sociales*. Paris: Masson et Cie.
- RUDDLE, Kenneth
 1979 The Crisis in Dryland Pastoral Economies: An Essay in Applied Human Ecology. 『国立民族学博物館研究報告』4(4): 821–846.
- SPOONER, B.
 1973 *The Cultural Ecology of Pastoral Nomads*. Addison-Wesley, Modules in Anthropology No. 45.
- SWIFT, Jeremy
 1975 Une économie nomade sahélienne face à la catastrophe—Les Touareg de l'Adrar des Iforas (Mali). In *Sécheresse et Famines du Sahel II*, Paris: Maspéro, pp. 87–101.
- SWIFT, Jeremy

小川 フルベ族の牧畜と農耕をめぐる諸問題

- 1977 Sahelian Pastoralists: Underdevelopment, Desertification, and Famine. *Annual Review of Anthropology*, 6: 457-478.
- Sy, Cheikh Tidiane
1969 *La Confrérie Sénégalaise des Mourides*. Paris: Présence Africaine.
- 丹野 正
1980 「山地ポコットの生態人類学的研究」『アフリカ研究』19: 32-50。
- TOURÉ, Alpha
1969 *Enquêtes socio-économiques en milieu éleveur*. Dakar: SERAS et Direction de l'élevage.
- 梅棹忠夫
1976 『狩猟と遊牧の世界——自然社会の進化——』講談社。
- VALENZA, J. and A. K. DIALLO
1972 *Etude des Pâturages Naturels du Nord Sénégal*. IEMVT/LNERV.
- VALLIER
1905 *Compte-rendu Géographique d'une 2^e Mission dans le Ferlo*. Dakar: Archives Nationales, 1G262.
- WILLIS, J. C.
1966 *A Dictionary of the Flowering Plants & Ferns*. Seventh ed. Revised by H. K. Airy Shaw. Cambridge Univ. Press.